

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十二年十月廿日印刷納本昭和十二年十一月一日發行

第三卷 第十一號

淨土

あまの



あまの
號月一十

中里介山著

法然上人傳

三六版二五〇頁
九ポバラルビ付
美麗クロース装
定價六十錢
(送料六錢)

法然上人を知ること、これは日本人として最大の常識である！

著者の言葉から

法然上人傳の權威は何んと云つても「勅修御傳」である。「勅修御傳」即ち「法然上人行狀繪圖」は伏見天皇、後伏見天皇、後二條天皇の三帝が法然の遺徳を深く敬信なされてゐたが、その時分は異教の手あひが争ひ起つて妄りに法然の傳記を作るに至つたので、正統の深くこれを憂ひ、天子にも御心を悩ませられた結果、後伏見上皇の勅により叡山功德院の舜昌法師が近代杜撰の著作を捨て、信用すべき實録をとつて收め、(中略)十四年を経てこの行を了へたものである。(中略)それ等を要譯してこの雅文の典籍を比較的安易に讀ましむることは現代人に對する一つの親切であると思ひて、敢てこれを爲して本書を作つた僭越の罪を許されたい。

古文豪の通俗化！

發賣所

法然上人鑽仰會

芝區芝公園二十五號地
振替東京八二一八七

◇ 隣人の友社 發行所 ◇

淺草寺貫主 大森亮順僧正序
大正大學教授 清水谷恭順著
(最新刊) 四六判二百頁美裝函入
價一圓二十錢送十二錢

放見經毒舌 送觀音經言言

非常時には必ず觀音力を受く

誰人でも觀音の力を念じたものは、いかなる厄難困苦も忽ち消散してしまふ。全國民は正に觀音の力を唱和して、あらゆる苦難を克服する秋である。

本書は最近の放送講義として絶讃を博したる名講義にして、その内容の平易さは装幀の美しさと相俟つて、觀音の妙智力を仰がしむ。

皇軍の必勝に、英靈の慰安に、銃後の國民の必ず所持すべき名著

加藤咄堂著 一圓 送十二錢
佛教とは何ぞや

岡本かの子著 一圓三十錢 送十二錢
佛教讀本

加藤咄堂著 一圓二十錢 送十二錢
死後はどうなる

中村古峽著 一圓 送十錢
迷信に陥るまで

岡本かの子著 一圓六十錢 送十四錢
觀音經を語る

倉田百三著 一圓三十錢 送十二錢
生活と一枚の宗教
附 治らずに治つた私の體驗

駒大教授林屋友次郎著 七十錢 送十錢
佛教の戦争觀

發行所 東京芝公園七ノ十
大東出版社
振替東京一九四七一番



◇ 浄土 第三卷 十一月號 目次 ◇

表紙……………中島松次
扉……………小島一谿

論說

皇軍は何故強いか……………前文部參與官 作田高太郎……………(二)

事變特輯

泥と山との戦線を往く……………都新聞 従軍記者 細井正道……………(五)

戦は永久に續く……………中野尅子……………(一〇)

支那の風俗……………後藤朝太郎……………(一四)

銃後を守る人々……………本誌記者……………(一七)

斷想 秋窓雜記……………里見達雄……………(二六)

信仰相談……………中村辨康……………(三三)

映畫 軍國小守唄……………佐藤宏……………(三三)

隨想 秋の譜……………川端祐輔……………(三六)



隨筆二題

黃葉寂光

吉田絃二郎 (一六)

人間の涙

生田花世 (二六)

血を湧かせた

昔の戦時ニュース

加藤新八 (二八)

佛教常識

(二九)

童話

不思議なお母さん (野水昌子畫)

松原敏夫 (三〇)

歌壇

與謝野晶子選 (三一)

俳壇

太田耳動子選 (三二)

法語解説

容易に實證し得るもの 中村辨康

(三三)

小説

敵城の報恩

(玉井徳太郎畫)

小島健三 (三四)

洪水異聞

(鈴木金平畫)

梅澤義明 (三五)

鐵仰運動ニュース

(三六)

編輯後記

(三七)

◆淨

土 第十三卷 第十一號

十一月號 目次 ◆

法然上人の 信仰生活

中村辨康 著 四一六頁 定價 送料共 三十三錢

これぞ光明！ 時代の悩みを一身に背負ひ、精魂をつからしめて、求めに求めた巨人が求道生活の跡！

現代日本人が擧つて求めてゐるものは現實の生活に確りと根を張つた正しい信仰である。それがこゝにある。宗教を特權から解放して正しく民衆の上に齎らした巨大無双なる聖、我らが祖師法然上人の辿り給ひし信仰の道程こそ、現代人の求めてやまぬ信仰と最も良く合致するものである。

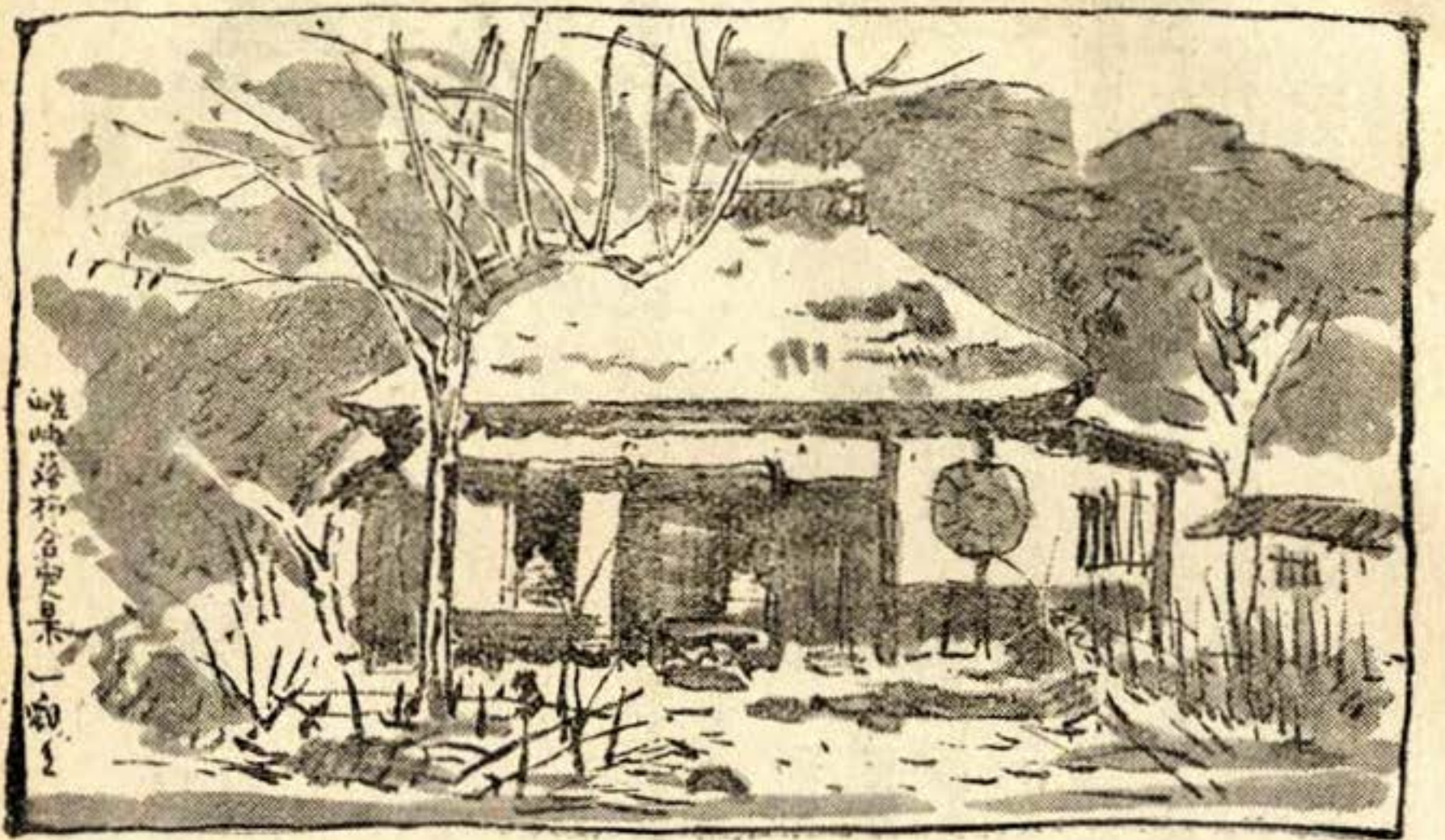
この書には、上人が萬人と共に悩み求められた求道、信仰の御生活を軸とし、それを廻る時代の種々相を描いて、何人にも納得の行くやう新切丁寧に説かれてある。
読んで得られよ！ 正しい信仰を！

目次

第一 求道生活——第一期求道生活——求道の動機、恩讐の彼方へ、菩提寺での生活、上洛の道すがら。第二期の求道生活——叡山の出家生活、功德院の學問生活。第三期の求道生活——讀書三昧の生活、叡空上人との接觸。第四期の求道生活——碩學歷訪の旅。第五期の求道生活——再び讀書生活へ。

第二 信仰生活——入信時代の新生活——強い自己反省、萬人を包む人間反省、開宗の根底。二開宗時代の生活——山を下つて京の町へ。三專修念佛の生活——信仰を萬人の胸へ、集つて来るあらゆる階級、偉大なる人格の力、大原勝林院の信仰問答、全佛教の再認識。四迫害受難の生活——三十年氣が付かなかつた恨み、具體化して來た迫害、弟子の罪を負ふて、逆縁を順縁と見る、死生を超へた信仰の力、配所から再び京へ、死後まで續けられた迫害、宗教の極致。法然上人年表

◇ 發行所 法然上人鑽仰會 ◇



淨

土

十一月號

念佛ねんぶつの興行こうぎやう

洛陽らくやうにして年としひさし

邊鄙へんびにおもむきて

田夫野人てんぷやびんをすゝめん事こと

年來ねんらいの本意ほんいなり

法然上人法語抄二五三



皇軍は何故強いのか

前文部参事官
代議士

作田 高太郎

確固不動の大信念の下に動く軍隊は無双の強さを有するものである。

長い間、暴虐の限りを盡して抗日に狂奔した支那に、我皇軍は遂に勘忍袋の緒を切つて、今や全支に膺懲の刃を振つて縦横無盡に活躍してゐる。北支では、峨々たる山地に、泥水身を没する大平原に、總らゆる辛酸を物ともせず神速果敢の進撃を續けてゐる。堅固な陣地を破竹の勢で次々に抜き、世界戦史に燦然たる光りを加へてゐる。中支では多年莫大な経費を以て構築した精巧無類のトーチカ或は周到極りなきクリークの防禦陣に、捨身の突撃を行つて、強大な敵兵を撃退せしめつゝある。毎日の新聞紙上を飾つてゐる上海戦線の悲壯な皇軍の活躍は、世界各国をして瞠

若たらしめてゐる。更に南支では鵬程幾千料、精銳無比の我空軍は銀翼を列ねて鬼神を泣かしむる勇壯な爆破を敢行し、支那の心膽を寒からしめてゐる。北支・中支・南支・我皇軍の往く處、連戦連勝、如何なる堅陣要衝も一たまりもない。何れの戦績も世界戦史を飾る壯觀ばかりである。

兵器は寧ろ諸外國の粹を集めた支那軍の方が優秀なものさへあると傳へられてゐるのに、我皇軍はどうしてこんなに強いのか。

この疑問を解く鍵は即ち信念である。我皇軍は確固不拔の信念に燃えてゐるから強いのだ。正義の爲に立ち、世界平和の爲に戦ひ、萬古無比の大君の爲に銃を取ると云ふ大信念があるからだ。忠孝を中心に培養せられて來た日本國民は、君の爲、國の爲に一

身を犠牲にする事を無上の榮譽に思つてゐる。この尊い歴史的傳統を受けついで我々の胸中には、國體の尊嚴を侵され國を危くせしめられる如き大事件に遭遇せば、憤然起つて自己を捧げる覺悟を藏してゐる。事變發生するや國民の間に澎湃として支那膺懲の聲が湧き起つて來たのはかゝる父祖傳來の尊い血が奔騰したからである。皇軍はこの歴史的傳統の中から生れて來たものである。従つて皇軍の中に烈々たる信念が燃え立つてゐるのは當然で、光輝ある歴史を汚すまいと自己を捧げて奮戦するのである。皇軍の強さは實にこゝに根ざしてゐる。支那軍の中にもなか／＼強い部隊があるが、それは矢張り或る信念を有してゐる部隊である。例へば上海で頑強に我軍に抵抗してゐる蒋介石麾下の中央軍は、多年にわたつて非道な抗日教育を受け、整然と系統的に吹きこまれた抗日意識は既に確固たる信念になつてゐる爲、他の支那兵と異つて非常な強さを發揮してゐる。即ち信念の有無によつて軍隊の強弱は定まるのである。

然し我皇軍の信念が烈々と燃え上つて來たのには、更に一つの理由がある。それは愛國の熱意と愛國の眞情と交々相凝つて憤然起つた國民一致の感激的歡呼の嵐である。全國至る所にくり展げられる熱誠そのものゝ歡送の聲は報國の至誠にをのゝいてゐる。

この壓倒されるやうな國民一致の感激の下に送られる將士は、かねて覺悟はしてゐても萬歳の嵐の中で、更に一段と心は緊張して盡忠報國の大決意をしつかりと固め、一死報國討たずば生きて歸らじの大信念が身體に漲つて來るのである。

はつきりした信念は抱いてゐたが、未だ抽象的であつたのが、この萬歳の嵐の中でほんとに身體の中に燃え上つて來るのである。派遣將士を慰問して來た友人は『必死の戦を續けてゐる時、總べての兵に先づ第一に想起されるのは國民の歡呼の聲である、この聲が耳底に響いて來るともう卑怯な事は出來ない、君の爲、國の爲に決然と敵地に突撃して行く』と語つたが、眞に動じない信念を烈々たらしめるのは、この國民一致の至誠報國の後援である。そしてかく皇軍と國民とかピッタリと一致して、外敵に當り得るのは尊嚴無比の國體、光輝ある二千五百年の歴史の力である。無敵皇軍の名も亦當然であらう。

若し更にこの信念に宗教的的信念が加へらるれば、より強さは深められる。眞の生命の問題を解決して、生死を超脱せしめるものは宗教的的信念だからである。支那に紅卍字會と云ふ新興宗教があるが、この宗教を信じてゐる支那兵は中央軍の中でも一きは強いと云はれてゐる。我國には幸にも純粹に日本化され、その上生

死の解脱を説く事、最も深遠なる大乘佛教が信ぜられてゐる。しかも私をして云はしむれば、盡忠報國、一命を君國に捧げると云ふ日本精神は大乘佛教によつて一段と深化せしめられたものである。佛教の説く永生の思想、無我の精神は、或は世界に類なき武士道を完成させ、或は盡忠報國の模範たる楠公の七生報國の大精神を結實せしめた。即ち佛教の深遠な哲理が尊嚴なる國體に同化せられた所に、始めて無比な日本精神が完成し、日本人の信念が確立したのである。この事を想起する時、我々は佛教的信仰が、今次の事變に如何に重要なものであるかに思ひ當るであらう。

然し私は大乘佛教の中でも特に法然上人の説かれた淨土教が最もこの事局に相應しい宗教であると信ずる。何となれば法然上人の教は大乘佛教の極致を最も端的に最も簡單に示顯してゐるからである。即ち念佛によつて往生を得ようとする事は、永遠の生命體たる阿彌陀佛を念ずる事によつて、この自我を滅して眞實の生命の中に生きて往かうとする事を意味してゐるからである。従つて心から念佛する者は如何なる生死の一大事に臨んでもビクともしない。この信念に生きた者こそ、心から「天皇陛下萬歳」を聲高らかに叫んで、從容として死に就けるのだ。皇軍の信念もこの大乘佛教の哲理によつて最後の固めを得るであらう。生死を超脱

した宗教的境地に達してこそ眞實の大事業は完徹される。世界平和達成と云ふ大事業の爲に雄々しくも進められてゐる今次の戦には、かくしてこの佛教の信念は最も重要なものであり、眞に強い皇軍を一層強める不可缺のものである。

いや皇軍のみではない。銃後の國民も亦時局の重大なるを認識して、一死報國の大信念を淨土教によつて眞に心の奥底から確立せしめねばならない。銃後の守りを固くする爲に國民精神總動員が叫ばれてゐるが、信念の確立は政治・教育よりも先づ第一に宗教に俟たねばならない。今こそ佛教が、特に法然上人の教が見直されて、全國民に受け入れらるべきである。上人の圓融な御人格と烈々たる御信念とが、そのまゝ、現代の國民のものとならねばならない。くり返して言ふが、日本人によつて始めて創唱され、日本人的性格たる實踐躬行、簡にして易を好む特質にピッタリ一致し、その爲に八百年の長い間、國民の血となり肉となつた淨土教こそ、現在の非常時に最も必要な宗教である。

この稿を書いてゐる間も、ラヂオは頻りに皇軍の連戦連勝を報じてゐる。この戦勝に酔はず、我々は更に覺悟を固めて、皇軍に感謝すると共に國民一體となつて、光輝ある歴史に再び燦たる光りを加へるべく努力しよう。



現地
報告
泥と山との戦線を往く

都新聞従軍記者 細井正道

難攻不落を誇つてゐた平緩線の居庸關は、八月二十三日朝我が千田部隊の決死の奮戦のために遂に陥落した。この壮烈な戦闘の間、千田部隊長の側にゐて二十一日來約二晝夜贈を冷しつゞけてゐた記者も、救はれた様にその日の夕方約六キロの後方にある南口鎮に引揚げて宿舎に入つた。南口の市は支那人はみんな逃げてしまつて、僅かに取残されたツヅラや長持などが家の前に投げ散らされてゐる。背負つてゐたリュックサックをどしりと下ろすと、今まで忘れてゐたウイスキーの小瓶のことがヤット記憶に甦る。

「さうだ、これで元氣をつけろ」

と、友人三人と盃に一杯づゝを分けて呑み合つてから軍で貸してくれた毛布一枚を土づくりの支那式の床に敷いてゴロリと横になつた——と急に首のまはりが痒い。ボリ／＼やる。今度は足だ、手だ、その中全身が無精に痒くて疲れたからだを休める所でない。まどろむことさへ出来ぬ。トウ／＼夜半の二時頃だと

云ふに起き出して戸外に出た。折柄月は満月、澄み渡つた空と静まりかへつた地上には晝の激しい戦塵の名残さへなく、憎悪も怨恨も生も死も消えた一つの安住の世界だけが展がつてゐる。フト聞くともなく耳をかたむけると、近くの支那民家のかげから「天然の美」を歌ふ聲が流れて来る。誘はれたやうにそこに近づいた。草の茂みの中に一人は寝そべつて月を仰いでゐるし、一人は腰を下ろした二人の兵士が夜露に濡れてゐる。

「どうした」

と問へば、

「イヤねむれないんですよ」

とニツコリ笑つた。

「南京蟲がひどいでせう」

南京蟲がひどいのだ。そしてねむれないので私も亦外に出たのだ。だが戦に疲れ切つた兵士さへ寝ないのに私など何の不平が云へるものか、私は

「ウン」と云つた切り口を閉ぢた。

そこへ腰を下ろして色々経験談を語り合つた。この兵士等は二十日に豊城を出發して來た砲兵隊だ。豊城から南口への途中にある沙河鎮まで八里、この道を四日かゝつた。

「四日？」

「エ、四日、一日二里、それも前線でドンドン聞える砲聲を聞いては早くあの線に参加したいと云ふ張り詰めた氣持だけでヤツと二里歩いたんです。普通なら——さうですネ。一里も歩けないでせう——泥ですよ。泥、雨降りのため道が泥の海になつてしまつて膝どころか股さへ入るひどい有様で馬も車も進まず、おまけに食料がないので附近の高梁を嚙んだり、唐もろこしや青茄子を食つて來ました。夜になれば必ず敗殘兵が高梁畠の中から射撃するので、こいつも退治しなくちやならんしネ」と彼は白い齒を見せて笑つた。記者も思ひ當る。八月十三日天津から獨流鎮に出る時

良王莊から約一里半の道を軍用トラックに便乗した。其日は猛雨で畠地も市街も湖の様に水が漲つてゐた。道は全くの泥沼、トラックは少し行くと深みへ落ちこんでとまる。乗つてゐる兵隊さん等は飛び下りて泥まみれになりながら之を押す。亦行く、亦とまる、亦押す、一里半の道を行くに三時間、兵隊さん等は乗せて貰つたのか押すために乗つたのかわからない有様だつた。尙ほひどいのはこの泥の中を馬車をひいて進む兵士だ。泥のため馬も動かねば車も動かない。やつと獨流鎮へついたので午後一時に良王莊を出發してから六時間もかゝつた午後七時頃、全身泥にしながら馬をいそがせ、自分で車を押したりひいたりしながらやつて来る。寫眞を撮らうと思つて迎へに出た記者の目の前で、一兵士は馬が泥に足を突込んだのを抱へ上げるやうにしながらグイと手綱を引いたはずみに馬は動かずにかへつて自分のたらだが泥の中に沈り

倒れてしまった。これを助け起した二、三の戦友と共に全身泥、そして起き上ると共に亦モク／＼と歩き出すのである。

「汚ねエぞ」

と冗談の様に笑つてゐる。兵士等の顔を見て記者は笑つていゝのか泣いていゝのかわからなかつたのだ。だが到着した兵隊さんは馬車をひいて來るとみんな湖の様な水溜の中へ飛びこんで行く。そして自分のからだの泥も猛雨にグシヨ濡れになつてゐることとも（雨具を着てゐないのだ）いとはず先づ馬の背から脚を洗つてやる。次いで車輪の間を埋めてゐる泥を落とす、スツカリ綺麗になつたところでニツコリ笑つて腰をのばす。これで一安心と云ふ所だ。雨が龍のやうに降り注ぐのも知らぬ顔で——日本の兵隊は強いと私は今更のやうに沁み／＼思ふのであつた。

八月二十七日午前五時、眞暗な朝靄を衝いて八達嶺へ出かけた。平緩線の鐵道づた

ひ、懷中電燈の光が火玉のやうに無氣味である。前夜から寝ないで作業中の工兵がなほも一生懸命鐵道修理中だ。線路は一間置き二間置きに取はずされてをり、橋と云ふ橋はどんな小さいものでも爆破されてゐる。線路のこはし方は唯釘を抜いてレールを取りはずすだけで、我が優れた技術家さんである鐵道隊の兵士が出かければ二、三分で苦もなく出來上るが橋の爆破は中々手ごはい。修理中の工兵さんは

「以前の支那兵の鐵道爆破といふのは、子供だまし見たいなもんでタワイもなかつたが、今のやり方は相當うまくやつてゐる。これで見ると支那の兵隊も中々技術も進んでゐるし訓練も出來てゐることがわかりますネエ」

と感心して語つてゐた。少し行くとトンネルに入る。敵の退却したばかりの跡のこゝとて中には小銃弾と手榴弾とが一杯、箱に詰めたまゝに棄てられてゐる。路傍には

青龍刀やシャベル、ツルパシ等、陣地構築や線路破壊用の道具がある。工兵隊に「奴等はトンネルの中には自雷火を仕掛けてゐるから氣をつけなさい」

といはれた注意が頭の中にこびりついて、肝を冷しながら前進だ。〇〇部隊の尖兵と共に進む。どこかで頻りに銃聲がする。フト自分の前を歩いてゐた伍長さんが「煙草をもつてゐたら一本くれませんか」と云ふ

「どうぞ」
と丁度持ち合せた一箱を差し出すと「一本いたゞきます」といつて呆氣にとられてゐる記者を構はず一本抜きとると共にこれを二つに切つて他の半分を隣の一兵士に

「どうだ」
と分け與へて「あゝうまい十日も煙草を吸はなかつたもんだから」



と記者に言つた。
 「そんなら尙ほさ
 らこの箱は上げま
 すよ」といへば、
 「さうですか、ぢ
 やあいたゞきま
 す、私はまた、今
 八達嶺の方へ行く
 と私等よりもつと
 苦しい目に逢つ
 た連中があるだら
 うからその連中に
 やつて貰ひたかつ
 たんですが——私
 が貰つておいて分
 けてやります」
 といふのだ。黙つ
 て歩きながら記者
 は何故煙草ぐらゐ
 もつと持つて來な

かつたんだと悔むやうな氣にさへなつた。
 午前九時半頃八達嶺についた。東には峨
 峨とした山が重疊とつらなつてをり、西北
 には察哈爾の平地がなだらかな丘陵性の山
 脈の彼方に見える。雄大世界第一の長城が
 南北に伸びてゐる。記者等は互ひに先陣を
 争ひながら息を切つて長城の内門をくゞり
 更に外門から一步察哈爾に踏みこむとそこ
 には既に到着した五百人ばかりの我が將兵
 が休憩してゐる。奈良部隊である。平綏線
 の攻撃線開始以來、鐵道南側の山また山、谷
 また谷を奮進した奈良部隊だ。部隊長に逢
 ふ。ス、けた様に黒光りするの汗と脂と
 埃と泥だ。鞆はボウ／＼、軍刀の鞘にかけ
 た覆革はスツカリ破れて見るかげもない。
 又銃線をはなれて草と石ころの大地には屍
 のやうに我が勇士等が無難作に身を投げ出
 してゐる。
 「秋草の咲き亂れるのを手折らうとする風
 流な心も起きず、只ひた進みに進む丈だつ

た。強い炎天のために日射病に倒れるものも多く、水に餓えた兵士の中からは赤痢やチブス患者も出たことは部隊長として子弟を預る身の何とも申し譯ないことと思ふ。

山の峻峻さは言語に絶し一つの峯をとればそこを退いた敵は亦他の峯にまはつて出て来るし、敵の陣地は重りあつた山の峯々につくられて岩窟の中や岩角にかくれて我軍の進出に對して猛射を加へるので、前進は全く容易でなかつた。馬の谷間へ落ちて死するもの十五頭、谷間の水を吞まうとして岩角や草の根にすがりながら降らうとしては迂り落ちて怪我するものも出た。食物といつたら後方からの連絡が全然出来ないため約半月、山の中をかけめぐつてゐる間殆んど米の飯を喰つたことはない。只唐もろこしや青蜜などだけで腹をふさいで來た。……」

こゝまで云つて部隊長は目を閉ぢられた約半月の稀有の山岳戦に失へる部下の幻

を追ふのであらうか、勇戦の跡を弔ふのであらうか。陽焼けた頬には滂沱たる涙を見るのである。傷いた兵士を後方へ退けて療養を加へる術もない。輕傷者が重傷者を背負つて後退せんとしても四方の山々から飛ぶ敵の十字火のため身動きさへ出来ないのだ。しかも食物も水もない。

「残しておくことは出来ない。だが私等の任務は更に重い。この將兵と別れて來たことを考へると身を裂かれる思ひがする」

奈良部隊長は口を閉ぢた。今度の北支のたゞかひは支那軍よりもむしろ北支の「自然」との戦ひだつた。その中でも平緩線の山岳戦は最も悲壯であつた。〇〇部隊の阪田部は一三九〇高地を奪取したが、敵も北部隊の要害と恃んでゐた所だけに續けざま逆襲を加へ亦勇猛な夜襲をもつて奪還戦をくりかへした。勿論こんなものに陣地を渡す我々ではない。勇戦亦勇戦常にこの敵を撃退したが、何しろ後方からの連絡が全

くないので糧食も彈丸も得られない。糧食は盡きた。一三九〇米、五千尺餘の山の頂にはあるものは石ころと一握りの草だけ、草の根をかみ草の露を吸ふだけだ。彈丸はなくなつた。二日目位からは敵がやつて來るとウンと手近へ引きつけておいて白刃をもつて突撃、格闘で撃退する外方法はなくなつた。そして時には石ころをブツつけて防ぐ様にもなつた。疲れ果てつゝも尚ほこの占領陣を死守すること一週間、一週目に來援した大場部隊を迎へた時には軍衣被もシャツも千切れて傷だらけのからだを暴露してゐた。だが斷じてその陣地は敵に渡さない。その目だけは烈々と敵を睨んでゐたのだ。あるものは大和魂！ 奈良部隊長は最後に云つた、

「だがどんな苦痛をなめても將兵の意氣は天を衝いてゐる。皇國のため斷じて敵を殲滅せずんば止まない。銃後の國民皆様によろしく」と。

戦ひは永久に續く

戦傷兵を慰問して——

中野 尅子

ホンの一月ばかり前に、「萬歳、萬歳」の聲で送つた同信の一人が、もう既に、

白一色の痛々しい、白衣の勇士の一人となつて凱旋し、見舞に行つた陸軍病院の一室のベッドの上に静かに在るのを見て、

「ヤア、名譽の戦傷で萬歳、萬歳」

なことは、どうしても云へず、

「ア、コレで彼も廢人として、これからの一生を戦つて行かんならぬのか」

と思ふと、何とも云ふに云へぬ同情の涙さへ先きにこみ上げて來て、どう

慰めたらいいやら、言葉が出て來ませんでした。

□「ヤア、名譽の戦傷を負はれて御氣の毒でした」

○「いや、こんなに早く負傷して了つて、全く申譯ありません。早く癒つて、戦場へ出て、戦つて戦つて、戦ひぬいて、今度こそは立派に名譽の戦死をして見せたいと思ふが、それも叶はなくなつて、今更ら皆さん達に逢はせる顔がありません。穴へも這入りたい心地です」

□「何が恥かしいもんですか。勿體ない。

奮戦して下さつたればこそ、負傷もせられたのです」

○「いや、さうぢやありません。私は、負傷もせず何度もう戦つて、最後まで生き残る勇士こそ、一番偉いのだと思ひます。それを私達のやうに、こんなに早く負傷して了つて送り返へされた者を、却つて一番の勳功者のやうに、このやうに、町重な歡迎や慰問を受けて、本當に面目なくて仕様がありません。今にも走り出せるなら、走り出して戦場へ行つてそして身をブツつけても戦つて見たいのだが、それも出來ねのが慚愧の至りで

す」

□「いや、さうぢやありません。早く負傷するものも、せぬものも、又立派な名譽の戦死を遂げられたのも、皆、一つですよ。

その現はれ方は違ふ、仕方は違ふが、戦つて下さつた氣持は同じで上下はありません。負傷した者ばかりが面目ないのでなく、又負傷せない者ばかりが偉いのもなく、同じ忠義の一念で戦つて下さつた事は一つだから、そんなに氣を勞つて下さることはないけません。それよりも一番恥づべき者があるのなら、それは私達、戰場にも立たず、銃後の勤めをなすべき者が十分に爲し果して居らぬ者こそ、本當に御國の爲めにも、又出征勇士の人々に對しても申譯なく、今後とも、十二分の努めをせねばならぬと思つてゐます。——」

○「いや、私は今度戰場へ立つて、いくつかの良い教を得て來ました。人間、實戦

野に立てるなソといふ事は、一生に一度有るか無しで其の意味からも、私達は非常に仕合せだつたと感謝してゐます。そして第一に感じた事は、先に云つた通り——多くの戦友が、まだ戦地に踏み止まつて轉戦に轉戦を重ねてゐるのに、私達だけが斯んなに後送されて、此の柔かいベッドの上に寝せて貰つてゐるといふ事が如何にも相濟まぬ事で、この心持ちから、これが妙な方面へ連想して、私は、私達の祖父さんや祖母さんに對しても非常な尊敬の心が湧いて來るやうになりました。

ソレはどう云ふ意味でかといふと、前云つた通り「いつまでも生き残つて戦つてゐる奴は偉いのだ——」といふ理由からです。あのお爺さんや、お婆さん達は、皆人生の戰場に於て戦ひぬいて、今もまだ戦つてゐる、最後まで生き残つてゐる名譽の勇士達です。我々のやうに早く負

傷したり、戦死したりする者の多い中に最後まで生き残つて戦ふといふ事は一通りの骨折りや苦心ぢやありません。そりや運だともいふでせう。又アナタの被仰るやうに、残つても残らぬでも、専心、戦つたといふ事は一つだとも云へば、それに違ひはありません。が然し、最後まで残つて／＼、人の十倍も二十倍も働くといふことは、矢張り偉い。私は心から尊敬の念を拂つてゐます。

だから、いつもベッドの上から、彼等戦友の身の上を念じて、私は皇軍の武運長久、戦友の勇戦奮闘を祈りづめに祈つてゐます。だから彼等最後まで勇士が、いつかは凱旋する時があるでせうから、其時は、我等へにも増して幾十倍の熱誠を以て歓迎してやつて下さい。それと共に、人生戰場での勇士である、現に生きてゐる老人達へ、此等凱旋將士へ向けると同じ絶大なる尊敬を、いやそれにも増

した敬愛——孝養を盡して下さい。これが私の銃後の方々へのお頼みです。そして私も老人に對する心持が、此の私の今度の出征を機縁として大轉換をしました。今までは本當に親に對しても、お婆さん、お爺さんに對しても全く粗末にして居て申譯ないといふ事を、沁々感じました。

全く、あの戰場では、彈丸の當らぬのが不思議ですよ。私達も、よくもこんな事で済んだ事だなアと、今もあきれてゐます。アノ時、どうやつて、アノ彈丸の中を進めたかと考へてもく、考へがつきません。それと同じように、人生戰場で戦つて來た人々も、私達と同じやうに全く『不思議にいのちながらへて……』で通つて來られた人ばかりでせう。それを思ふと心から、なつかしく、慕はしくなります——」

□「いや、とんだ慰問に來て、慰問されて

了ひましたなア……」

○「いやそうぢさなく、私は、誰か我々と同じやうな心の知友を見たら、眞先きにまあコノ事を語らうと思つてゐたのです」

□「それは有難度う。それと共にアナタ方の手柄話を一つ聞かして下さい」

○「いや手柄なして、手柄らしい手柄も立たない内に、やられて了つたんですから、全くお恥かしい次第です。それでも、いくつか尊い體驗を得ました。

第一人間は、どんなにも困苦に堪へれるものだといふ強い信念を得ました。それから、コレはアナタにも聞いて頂いて改めて信仰に就いて御指導を得たいと思つてゐる事は、私は今度戰場に立つて、信仰といふものがガラリと變りました。そしてアナタが日頃色々云うて教へてゐて下さつた御言葉が、今更のやうにわかつて來ました。

今迄は、私は、矢張りインテリ宗教だ

つたのです。矢張り聞いたたり——讀んだり——考へたりして、頭の中へ了つてゐた信仰です。どんなにヒドク、あなたからブチのめされても、『いや、俺は立派に體驗の宗教だ』と定め切つてゐました。ところが『其の體驗の宗教』が『頭の信仰』であつた事がわかりました。私は、初めて、あの「ドーン。タタタタ……」といふ大砲の音や機銃の音を聞いた時、腹の底まで大砲の丸を打込まれたやうに『ドーン！』と感じました。それはお恥しいやうな事です、戰場での大砲の音は、本當に演習の時などとは違つて、眞に腹のドン底までズシーンと響いて來ます。初めは足は地についてゐるが、どうしても魂が地につきません。グーと胸元へ衝き上がつて來て居て、實際氣持の悪いものです。それがコチラもドーン！ドーン！と打ち出すと、

「エイ、糞！ やツつけろ！」

と度胸がきまつて、遮二無二突き進むやうになります。それからといふものは、グーと胸につかへてゐたものが下つて行つて、自分でも自分乍ら、非常に強くなつたといふ事がハッキリわかりました。

そしてコレが信念だと思ひました。そして「エイ、死ぬまで、やっつけるのだ！」と腹がきまると、もう恐ろしいことはなくなります。そりや、國を出る時から、死を決して來ましたが、それは矢張り頭の中できめてゐた切りです。後から思ふとよくわかる。本當に腹のきまるのは、大砲の音を聞いて「進め！」といふアノ聲を聞いて、諸共に——

「何、糞！」

といふ意氣込みで飛び出してからです。

初めて生き／＼した。ピン／＼した人間になつたやうな氣がします。『大和魂』といふのはコレだな！といふことがハッキリわかりました。こんな事を云つても

御笑ひ下さるな、全くです。私は初めて『大和魂』を發見したのです。そして「コレが本當の軍人精神だな！」といふことを感じました。そしてコレで漸く一人前の人間になれた。男らしい男になつたと思ひました。

人間は一遍戦境を踏んで來ませんとあきません。

その意味で私は、今度、腕一本位失つて歸りましたが、一本位失つても、シツカリした魂を得て歸りました。「活きた信念」を腹の中へ打ち込んで歸りました。だから腕一本位失くしても、コレカラの生活なシに決して心配しませんが、必ずや立派な一人前の日本人として、誰にも負けぬだけの仕事を、やつてのけるつもりです。だから御安心下さい。

アナタが「死んで來い」と云つて下さつた御言葉が、古い私に死んで、新

しい私に生れ返つて 歸つて來い』といふ意味だつたなといふ事がハッキリわかりました。そして、私は、今、立派に「新しい私」になつて立ち返る事が出來ました。これが何よりも嬉しい私の「眞の凱旋」です。

「コレからは、必ずやります——」
今頃、負傷して、こんな恥かしい姿をオメ／＼と皆さんの前に晒して申譯ないが、其の代り、此の恥辱を雪ぐだけの御恩返しを、御國の爲めにも必ず盡して見せます。御覽下さい……」

□「ア、立派な軍人さんだ！ 見上げた帝國軍人だ！ 立派な日本人だ！ アナタを見習つて總ての者が後に伴きます。シツカリやつて下さい。コレカラの戦争が本當の戦争ですからネ……戦争は永久に續く——」

(この項終り)



支那の風俗

後藤朝太郎

支那のお寺のこと

支那では一般に僧侶などでも死後を語らうとはしない。これはむしろ不思議に思はれる位である。阿彌陀の慈悲によつて後生を願ふことは、一切衆生を濟度する上にこれを第一に考へ、死後の生活に最も力を入れてよささうなものである。が私も随分と支那僧相手に山門の客堂あたりで、佛道を語つて見たが、未だ曾つて一度も支那僧のから死後の生活、未來の話聞いたことがない。最も今日支那で榮つてゐるものは禪寺であるから、そのせいもあると云へば云

へないことはないが、日本のお寺の様にお葬式を取扱つたり、檀家の家へお經を上げに行つたりする様な仕事はしない。寺は主として修道院といった様な形で、寺の内部でも日本の冷い所謂お寺氣分なるものを漂はせてゐない。寔に朗なものであつて、千客萬來善男善女のお籠りも賑かで、どちらかといへばのんびりとした感じがある。勿論貧乏寺もあるが、南支那にある禪寺では、裕福な寺が多い。この寺の規模や構造は、日本の寺々よりも一層大仕掛に出てゐる。寺だけで社會事業もやるし、又澤山の穀物、野菜、漬物その他の材料をう

んと貯つて謂はゞ一種の一小國とでも云ふものを形成してゐる。

話が脇道にそれたが、支那僧の死後のことを云はないと云ふことは、釋尊の佛典は佛典だ、自分は自分だと斷然たる區別を置いて、佛典に何が書いてあらうか、寺僧そのものの、腹の底には何等觸るゝ處がないのである。身は山門の中にあつても自己は何處までも自己である。そこが支那の寺僧の心の持ちかたの特色とする處で、容易に他から覆へされない底力があるといへば言へる。讀經もし佛弟子の形をとつても、自分もどこまでも自分であつて、何等讀經に囚はれないと云ふ。

尼寺も随分ある。例へば上海を中心とした蘇州、杭州の附近の江南地方には、接客の上に於いても存外開けてゐる尼寺があちこちに見受けられる。これに就いて色々の評判もあるが、こゝでは省略することにしよう。

支那人氣質

支那僧に於いて見る様に、支那の人々の常識とか氣質とかは、日本人から仲々想像の出来ないものがある。國が茫漠として廣い様に氣分まで、脱俗的氣持と云はうか兎に角屈托のないものがある。

實際支那へ行つて、あの洋々たる揚子江あたりを眺めて、そこに人の首が一つ位流れてゐても、日本で感ずる様な慘酷味は少しも感じないから妙だ。平生の爲すことに對しても細事など物の數に入れてゐない處がある。例へば、商人にしろ、寺僧にしろ、その食事をする前に多く手を洗ふ習慣がある。そのかはり便所で用をたしたあとで手を洗ふことはしない。事情を知らずに『なぜ陳さん剛から出て来て手を洗はないか』と尋ねると、『だつて手についてゐないんですから洗はなくてもよいでせう』と來るのである。

又町の商人で、近所の家で自分の好きなものを見た時、それを失敬して持ち歸つて自分の家の棚の上におく。すると取られた家の人はその後遊びに來て自分の家の品物があると、又その棚の上に手を伸してそつと家へ持つて來る。この間雙方平氣で何等氣にとめない。然しこんな氣質の半面經濟觀念は非常に發達してゐる。

戦争も一つの商賣

經濟觀念に就いては、よく日本に留學してゐる學生などが、授業料を何遍催促しても仲々納めない。ヤツト退學處分と云ふ様なキリ／＼の處へ來て授業料を納める。『なんだ、持つてゐるなら早く出せば……』と日本人は思ふ處だが、彼等はさうでない。少しでも長く銀行へでも積んでおけばそれだけ利子が餘分に入る……と云ふ風に考へてゐる。

支那の戦争は商取引の一變形であつて、

軍隊はかねで自由に動く。かねになるから失業者も傭兵に應募する。一つの都城を攻める。掠奪、侮辱の非行は勝手にやる。上官は見ても見ぬ振りをしてゐる。戦争そのものも物になればこそ開始するのである。若し一戦を交へずして折衝だけで、算盤がとれる成算があれば何を苦しんで戦争などをするやうと云ふ。だから總司令部の大將で、たんまりもらつて寝返りを打つても、部下は何の憤慨もなしについて行く。その代り勇將の下には弱卒はなしで、敵味方の兵隊が、日曜日かなにかに公園で會つて話をする。『君の方の月給はいくらか、手當はどれだけか』とお互に尋ねる。『ちや、多いから君の方へ行かう』と云ふ始末で、すぐその瞬間から敵の方へ平氣で行く。

嬪天下の支那

最後に家庭内の話でもしてこの筆を止めることにする。今日本に盾ついてゐる蒋介石

石夫人宋美齡は、今年三十九歳の女盛りであるが、南京の西太后といはれる位に、行政上などに手腕を振つてゐる。この宋一族は諸君も新聞等で知つてゐる様に富豪の一族である。だから既に夫人を持つてゐた蒋介石が、アメリカ歸りの楚々たる宋美齡を見て、お互に戀愛しあつて、前夫人を離縁し、夫婦になつたことは蔣も宋もお互に期する處があつたものらしい。何はともあれ、亭主は多く殆んど細君の前では頭が上らない。支那の女は元來男の隷屬物として玩弄視されてゐて、家庭内にそんな勢力があるかと云ふと、一寸矛盾の様に考へられるが、その内房生活などを知ると成程と云ふなづかれる點がある。

古來帝王が、その愛する美后美妃の一顰一笑を求めてその意を満す爲めに云ふ通りになつたことは、桀王の末喜、紂王の妲己、幽王の褒姒、玄宗の楊貴妃等々その代表的人物を見ても解る。

家庭内の細君は、財政をちやんと摘んでゐる。若し第二號、第三號以下を迎へるにしても第一夫人のお眼鏡に適つた者でなければ敷居を跨がせない。又その家族にした處が、頭數も五十人、八十人、百人、二百人といふ大家族主義で、一緒に住んでゐるのであるから、その複雑さは大變なものである。

だからこれを治めて行く第一夫人には、相當の手腕がなければ統制は出来ない。主人はそれに附いて流れてゐる位でないと、うまく納らない。細君以上に奉られてゐる様なものゝ、實權は細君が握り、主人はその上にフンワリと坐つて居て、全體を風に柳と受けて流してゐる態がよろしく、これが支那の良家庭とされてゐる。だから支那では、男に生まれるより女に生まれた方がよいと云はれてゐる。

街の
佳話

銃後を守る人々 (その一)

本誌記者

女二人の米屋さん

向島區寺島六丁目の根岸米屋さんでは働
き手の忠一さんが召集された。

たつた一人の男手の忠一さんの後に残さ
れた者は年老いた母のピンさんとこの春嫁
いで来たばかりのカツ子さんの女手二人。

労働の殊にはげしい米屋さんで細々ながら
忠一青年の腕一本で支へてゐた店が、たつ
た今の方の出動命令で閉店しなければなら
ないみじめさに變つてしまつたのだ。

身よりもともないピンさんとカツ子さん
は、一時は氣も狂ひそうであつた。

然し氣丈な老母ピンさんはあわてなかつ
た。貞淑な新妻のカツ子さんも苦しみの色
を抑へる事が出来た。

御國の爲だ。息子の忠一が今こそ漸く自
分の責任を果す時と處を得たのだと覺ると
女ながら自然に勇氣が湧いて来る。

女が働かないと言ふ法はない。力仕事で
も女に出来ない筈はない。慣れる事が第一
だと氣なげにも店に老母を残してカツ子さ
んは重い米俵をリヤカーに乗せて積み歩き
始めた。若い力強い女の身で、白い肌も陽
にやけた、弱いなよやかな手のゆびもこは
ばるほどだ。然しカツ子さんの美しい心と
雄々しい氣力に張り切つた身は人魚の様に
若々しさに神々しさを加へて働くものゝみ
知る法悦の中に生きて行く事が出来た。

折柄訪ふた市や區の役人たちに、
『御國の爲に悴を捧げたからには悴に立派
な働きをしてもらふ事ばかりが楽しみで

す。たとひ老ひても、女でも、私たちはき
つと悴に心をきなく働かせる様に、心配な
く後を守つて店をやつて行く積りです。決
して市や、區の補助金なんか頂きません。
私たちは義務をはたすだけです』と語つて
役所の給與金を受けないと言ふのだ。

頼りにしてゐた父の三吉さんは大震災後
行方不明になるし、今やつと悴が成人して
樂になりかけたのに、この事變で、泣くに
も泣けぬピンさんの心情は、『お互ひは國の
爲です、私などよりも、もつと／＼苦しい
人さんも多いでせうに』と決意を語る力強
さがあつてこそ銃後は固く長く守りうる、
それに増して新妻のカツ子さんはどんなに
か淋しくも悲しい事であらふ。でも愛する
夫の心の中に生き行く事は、母の心と一つ
になつて命にかけても老いたる母を、夫の
店を、守り通して行く事以外にない。カツ
子さんのこの優しくも強い心構があつてこ
そ忠一さんの武勳はいよく輝くのだ。



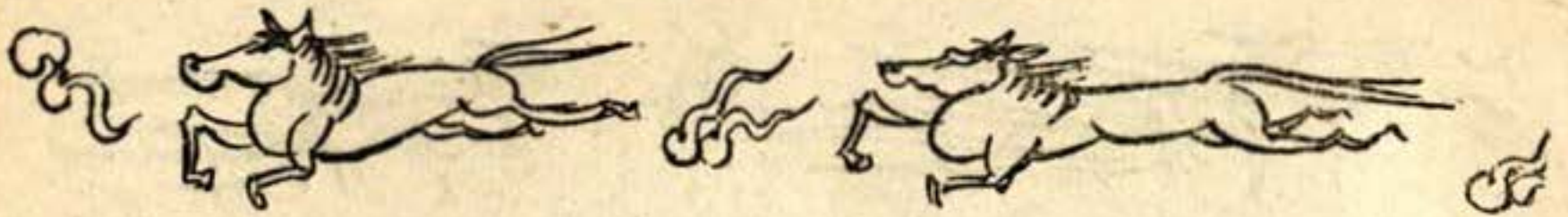
黄葉寂光

吉田 絃二郎

けさ釧路の友からのたよりには牧場の菩提樹には霜が降つて、黄葉しはじめたといふことであつた、妻が亡くなつたのは菩提樹の花の眞白に咲いてゐるころであつたことなどを想ひ出しつゝ友の手紙を読んだ。

不圖庭を眺めると、そこには黄葉しはじめた辛夷が紅い實を見せてゐた。今年の春は辛夷がいつにもなくて雪のやうな花を一面に咲かしてゐたのを妻と二人で縁側に出ては眺めてゐた。わたくしたちは辛夷の實の赤く色付き、渡り鳥の群のおとづれる日をどんなにか待つたであらう。今になると明日を期してゐた凡愚のあはれさをしみじみ思

ふ。人々は今後生きて行くためにいろいろな計畫をすゝめてくれる。しかしそれは現在わたくしにとつては悲しみを麻痺させるための手段に過ぎない。わたくしは決して悲歎をも寂寥をも避けようとはおもはない。わたくしはむしろ佛前に枯坐して涙を失ふ日の來らんことを恐れる。わたくしは生きてゐる間妻の遺骨を擁して涙せんことを冀ふ。この涙こそ、悲歎こそ、寂寞こそ凡夫の唯一の供養である。わたくしは死の易きことを知つてゐる。死を願はない日とてはない。しかし死は必ず來る。わたくしは一日でも長く妻のために涙を灑いでやらなければならぬ。わたくしは今こそ生くることの苦しさ、生くることの尊さを知る。



わたくしは妻の百ヶ日の準備をするために日本橋まで出かけて行つた。花やかなデパートの大理石の階段を歩きつゝわたくしは幾度涙したことであらう。銀座を歩くころは日も暮れて雨も降つてゐた。わたくしは生前妻が好んでゐた菓子をもとめ、病院の妻のためにかつてサンキストのオレンドを買つた店に立ち寄つて花をもとめた。わたくしはたゞ一人雨の中を歩きつゝ泣きに泣いた。また或る時は若い女の狂人を見た。わたくしは「妻が狂人になつて歸り路を忘れてゐるのではないか。そしたらどんなにうれしからう」と思つた。そして女狂人の顔を覗いても見た。明日は百ヶ日である。しかしわたくしはまだこれが夢であつてくれと願つてゐる。愚かなる男よ。

×

夜ごとに蟲の音も衰へてゆく。つひこのあひだまで庭の鶏頭や萩の下にすだきつゝあつた鈴虫も草雲雀も邯鄲もいつの間にか絶えてしまつた。今はたゞこぼろぎのみが夜となく、朝となく、眞晝

となく鳴いてゐる。こぼろぎの聲を「死に支度いたせいたせ」と聞いた俳諧寺一茶の心を思ふ。

病院から連れてかへつた妻の静寂そのものゝやうな死顔がじつとわたくしの心を見つめてゐる。大なる死、美しい死、静かな死、尊い死、寂然たる死、いろいろな言葉を當てはめて見る。しかし死はさらにそれ以上のものである。

いろいろな世間的な仕事にわたくしの心を紛らさうとするのはたゞの方便にすぎない。わたくしはじつと静かな死の姿を凝視めなければならぬ。

わたくしは夜のとほそを明け歸り來ぬ妻の聲音を待つであらう。永遠に妻は歸らないであらう。しかしわたくしはなほ生きてゐる間、夜毎にとほそを明けて妻の聲音を待つであらう。誰がわたくしのこの心を笑ふことができようぞ。形にこそ見えね、その刹那妻の聲音をわたくしは涙に感じるのだ。

庭の萩も散つた。妻と二人見るために植ゑて置いた菊が咲きはじめた。わたくしはじつと庭の菊を眺めてゐる。わたくしは妻の姿を見ることができない。しかしわたくしは妻にささやく「美しい菊が咲いたよ。」わたくしは妻の微笑をわたくしの涙の裡に見出す。



松

わたくしは朝ごとに、夜ごとに佛前に諷經する。永劫の時空をへだてゝ妻は旅しつゝあるであらう。しかし刹那にわたくしはわたくし自身の裡になほ生きつゝ、微笑みつゝある妻を感じる。今こそかの女は全的にわたくしの裡に生きつゝあるのだ。わたくしは經讀む聲を發することができなくなる。しかもその刹那涙の裡にかの女は立ち歸つて来る。

生きて亡き人を思ふことは苦しい。しかし生きてあればこそこの苦しみ、この悲しみを味ふことができるのだ。子供もないわたくしたちの生活では誰かゞ一人は必ず後に生き残つてこの悲しみを味はなければならなかつたのだ。わたくしはこの悲しい役目を引き受けることになつた。わたくしはこの悲しい役目を最後まで果たすために生きなければならぬ。この悲しい運命を感謝しよう。

今朝わたくしはいつになく朝寢をした。眼をさました頃は朝の日の光りが蚊帳の隅を明るくしてゐた。わたくしは妻を失つた男の悲しみをしみじ

みと感じつゝ庭の辛夷の實を啄む渡り鳥の聲を聴いてゐた。わたくしはこの後幾度このやうな秋をくりかへさなければならぬであらう。わたくしは昨日はじめて知つた或る女の自殺のことを考へたりした。薬を嚥んだのでせう。靜かな死に方でした。自分で電報まで打つてから、床を伸べて薬を飲んだらしいのです。昨日聞いたばかりの友人の言葉がはつきりとわたくしの耳に刻みつけられてゐた。その自殺した女には十數年前靜岡の海岸で二度ばかり遭つたこともあつたので、一しほのあはれさを感じないわけにはゆかなかつた。

眠れ眠れうき世の秋もよそながら

×

子供のないわたくしの家では妻のために菩提を念ずる者といつてはわたくし一代のことであれば、わたくしは妻のためにわたくしの一生を通じて世の人々の幾代分をも念じてやらなければならぬ。

わたくしは庭の山茶花を折り、コスモスを折り、薔薇を折り、谷牡丹を折り、紫苑を折つて佛前に供へる。佛間の軒ち



かく落ちたる栗を供へ、畑の柿を供へては亡き妻と語る。

妻を失つて以來わたくしの自然に對する關心は一層深くなつたことを感じる。わたくしはこの秋ほど深く秋のよさ、秋の靜寂を感じたことはない。一莖の草の花にも、いつにもまして深きものを感じてゐる。一輪の山茶花に對しても、今までにく尊いものを感じてゐる。それだけに一層深く妻の死を悲しむ。せめてこの秋の一日だけでもよみがへらしてやりたい。

わたくしはこの悲しみを麻痺させてはならぬ。わたくしは靜かな妻の臨終の俤を忘れてはならぬ。妻の死を想ふ一念の裡に永劫無限の或るものを感じなければならぬ。一切を撥無することによりて一切の究竟に徹しなければならぬ。幾度か死を思ふ悲しみの底に、さらに深き悲しみを見出さなければならぬ。

わたくしは日に日に人に逢ふことの苦痛を感じるやうになつた。人に逢つてゐるわたくしは方便

的な生活に生きんとする自分を見出すからだ。わたくしは今こそ本然的に生活し、究竟的に思惟しなければならぬ。一切からずんば無の精進に生きなければならぬ。

わたくしはこの刹那死するとも悲しまないであらう。しかし生きることをゆるされるならば、尙ほ突きつめた思惟と生存の方法に生きなければならぬ。

人は死ぬ。この簡單なしかも最も悲しい大事に直面して思ふこと深く、悲しむこと切にして、骨を削り、肉を殺ぐほどの精進なくしてはまことに申し譯なきことであると思ふ。わたくしは朝毎の涙を苦しいとは思はない。朝毎夜毎の悲痛さをありがたく思ふ。もしこの涙の涸く日の來らんか、わたくしはむしろ死を思ふであらう。せめてこの涙こそ三十年の間妻を苦しめた凡夫の唯一の供養である。

愛 國
抒情詩

軍 國 子 守 唄

脚 本 中 村 能 行
監 督 原 研 吉
撮 影 濱 村 義 康

配 役

武田光子……坪内美子
妹八重子……大塚君代
母 お豊……飯田蝶子
種田三郎……近衛敏明
中原速男……笠 智衆
生島英一……寺内 修
島 ……南部耕作
國防婦人會大船分會(田中絹
代以下全女子所員)大船軍事
奉公會(城戸所長以下全男子
所員)

物 語

お豊は教育程度こそ低かつたが律義な所謂昔ながらの貞女型の性格の持主であつた。縁あつて嫁いだ亭主は幾何もなく光

子と八重子の二女を残して死んで行つた。

娘二人

を抱へて、お豊の血みどろの生活はどうやら今日まで無

事に成長させたのであつた。母お豊は娘の將來を夢見ては其の内立派な青年と結婚させ祖母としての喜びに思ひを走らせて居た。だが姉嬢光子はも早や意中の人速男とは離れる事の出来ぬ間柄にまで進んでゐた。純情でしかも氣の弱い光子ではあつたが二人の幸福は結婚の一筋以外にないと決心し眼に許しを乞うたが近代青年男女の戀愛を理解せぬ母お豊はむしろ速男を最愛の娘光子を誘惑する不良青年なりと罵り光子の乞ひを許さうともしなかつた。限りなき母の愛そして父親をもたぬ姉妹として互ひに庇ひ合つて來た妹八重子を思ふ時、彼女の立場はつらかつた。だが青年速男を慕ふ情はつひに家を捨て母の嘆きに反抗して愛人と其の姿をこの町から消したのであつた。

このこと

があつてから母お豊は
極度に娘に對する教育

を嚴格にするのであつた。妹八重子は獨

り姉光子の心を知り同情せずにはいられ

なかつた。夫は春の微風にも似た過ぎる事

の出来ぬ心のとときめきを知つてゐたから

である。彼女は青年英一と相愛の仲であつ

た。姉光子は出奔以來數ヶ月、已に身重

の體になつてゐた。愛人連男は豫想以上

の生活の重壓に堪へ兼ね今では光子を足

手纏ひとして厭ふ様になつてゐた。こんな

生活は連男唯一人を手頼とする光子をど

の様に悲しませたことであつたらう。然し

恐れと

日はつひに來た。連男は無斷
で光子を捨て去つたのだ。母

お豊は光子を許す筈はなかつた。妹八重

子の懸命の取なしも今は空しく光子は伯

父の源吉を頼つて行かねばならぬのであつ

た。光子は暗い電燈の下で生れ出た我子の

將來の爲めに力強く母として生きねばな

らぬと誓つた、只管過去を忘れ愛兒への幸
福を唯一つの願望としてゐる光子の可憐
な姿に伯父源吉の眼頭は常に涙が滲ん



で居た。妹八重子は、こんないきさつか
らますく生島との愛を母親に打ち明け兼

ねてゐたのである。或日源吉は母お豊を訪
ねた。源吉「なあ母ちゃんお光をあのみま
でおくのは餘り可愛想ぢやねえか、せめて
お前だけでも許すと云つてやつてくれねエ
か、なアこれからあいつの苦勞を考へ
ると俺は泣かされるんだ」母お豊の心は二
十餘年前の想ひ出にかき亂された。しかし
彼女の一徹な心は我子の愛に引かされな
がらも伯父源吉の言葉を聞き入れようとは
しなかつた。お光は無邪氣な子供等の遊び
戯むれる様を見ても我子の將來に限りな
き不安と焦躁に驅られるのであつた。愛人
連男との樂しき思出もはかなく、今や光子
は止むなく自活の道を立てねばならなく
なつた。

丁度其の

頃街頭は暴戻支那を徹底
膺懲すべしとの舉國一致

の氣が満ちてゐた。出征兵士を送る歡呼

の聲、千人針に群る人々、興奮に漲つた人

の面、光子は買物に出て堂々行進する出

征兵を見送り人波にもまれる内に全く偶然にも嘗つて車中で親切にいたはつてくれ

た青年種田に邂逅

した。彼女には此

の偶然が何か不思議

なめぐり合せの

様に思はれてなら

なかつた。母が常

に云ふ因縁とはこ

の事ではないかと

も思はれた、彼女

は種田の好意によ

つて彼の勤めてゐ

る建築會社の事

務員として働く

ことなつたのであ

る。

ひしが

れた

海棠の様に可憐な中にも我子

の幸をひたむきに祈りつゝ、働く彼女の



妻は美しき中にも何かしら崇高な感じが社員をして彼女を評判させてゐた。中にも

種田は彼女の

直接の紹介者

だけに一層社員

仲間に取沙汰さ

れる様になつ

た。彼はむきに

なつた否定する

自分の心の虚

偽が漸く明瞭

になつて行くの

をどうすること

も出来なかつ

た。或日のこと

彼はニュース劇

場へ光子を誘

つた。彼は清麗

な光子の瞳を見る時幾度か彼の心を打明

けることの不躰さに躊躇した。しかし彼

女の眞實の思慕は遂に彼をしてその心の内を發露させたのである。彼女は種田の純

愛に涙のはふりおつるの覺えた。併しそ

れと同時に已に子の母である自分を思ふ

時彼の申出を素直に受入れる事が出来

なかつた。何かしら過去の一切を告白する

ことによつて種田との交際が永久に絶たれ

る様な氣がして淋しかつた。知らず／＼種

田の誠意に引かされて行く自分を見出して

愕然とした。さうだ私には妨やがゐるのだ、

打明ける可きが正しいと知りつゝも人間的

な淋しさが胸中を往來した。併し純情

な彼を偽る可く餘りに彼女は良心的であ

つた。

或る日

一切を彼に告白した。だが種田の心が如何にも強くひた

むきであつた。却つて眞實の告白が一層種

田の心をして彼女への思慕を強めるので

あつた。光子の前途には漸く黎明が輝き

初めたのであつた。

母お豊は近頃になつてめつきり衰へ行く自分を感ぜずにはゐられなかつた。ひしひしと求め行く我子への愛情はつひ妹娘八重子の願ひを聞き入れて其の戀人生島と會つた。そして涙で八重子の將來を生島に願ふ優しい母親だつた。八重子や生島達の眞實はやがて姉光子の許される日を到來させたのである。光子の純眞な愛情を裏切つて利己的な世界へ逃避してゐた嘗つての愛人中原は世の中の眞の幸福は眞剣に思ひ合ふ者のみに與へらるゝ事を自覺した。彼は光子母子のアパートを訪うて心から謝罪するのであつた。光子は今更乍ら血と血をつなぐ父子の不思議な因縁がかくあらしめたと深く感ずるのであつた。だがその時已に連男は皇軍の猛夫として召集されてゐた。大義親を滅す、斷ち難き愛執の絆を斷ちて光子母子は連男の出征を送るのであつた。生島も又出征する身であつた。愛の勝利に心強く二人は皇國の敵

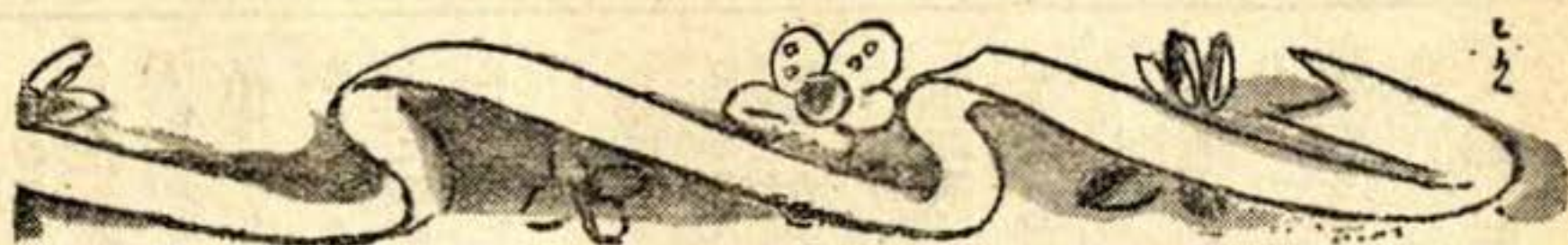
を全滅す可しと誓つたのである。今こそ舉國一致外敵に當るべきの秋、送らるゝもの、瞳には皇國の軍人として又永遠の愛の勝利者として輝しき決意がひらめき送るもの、涙の瞳には銃後の強き護りを誓つてゐた。光子、八重子、それは母として又大和撫子として雄々しくも聖なる姿である。軍國の秋は悲しくも雄々しい愛國の赤誠に喜怒哀色にとけ合つてしまふのであつた。

(了)



佐藤 宏

松竹大船作品



秋窓雜記

里見達雄

四五人集ると必ず支那事變が話題に上る、それは當然だ。これもこの間、或る會合の席上、備らずも隣り合はせた豊山派教員部長中村敦信君から聞いた話だが、事變が始まつて間も無い頃だといふから多分七八月の候でもあらう、各國の武官が、天津の練兵場に——であつたかどうか餘りはつきりしないが——落ち合つて、時節柄、職業柄、自ら事變を中心に雜談の花を咲かせて居たが、その一人が「お互の國の軍隊で必ず支那兵に勝てるといふ自信があるか」といふ問題を提出したところ、「必ず勝てる」と答へ得たものは一人も無く、却つて「支那兵は強い」といふ結論に到達した。傍人——それは日本人だが——餘り癪に障はるので「日本兵はどうだ」と質したところ、武官の一人は眞面目に「日本兵は神業だ」と答へ、他の悉くが肯いて同感の意を表したといふ、我々としては胸の空くやうな、臉の熱くなる話である。

秋の譜

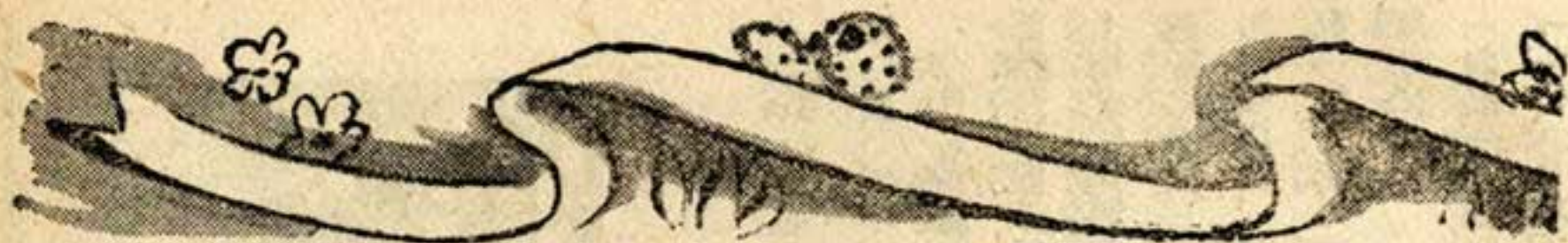
川端祐輔

眞野先生が平塚へ轉地療養に行かれてからもう三ヶ月餘りになる。あの頃は初夏の薫りが嫩葉をとほして香つてゐたのに、はやすだく蟲の音に淋しい秋を知る様になつた。仕事に追はれて暫く先生の病床をお見舞する機会もなかつたが、九月末の日曜に友とたづさへて、久しぶりに平塚の寓を訪れる事が出来た。秋の寂しい風物の中で、特に病の感傷が、どんなに先生を孤獨に陥入れてゐる事であらうと思ひながら全快を心から祈るのであつた。

大學の研究室や、會の事務所で、元氣一杯、論談風發されてゐた三ヶ月前の先生がしきりに懐しく思ひ出されてならない。

談佳境に入れば、灰皿に「みのり」の吸ひ殻が溢れ、煙草の箱が空になる頃には、足が机の上にチヨコンと乗つてゐた。

かうした數々の特徴的な先生の所作が、一瞬裏をかすめて通る。



蘆溝橋の一夜、眞夏の夢を破つて一發の銃聲が轟いてから未だ百日とは経つて居らぬ。然るにどうだ、皇軍の活躍は陸に海に素晴らしい戦果を収め、空軍の如き遠く海を越えて奥地に進入し、今や支那全土を席捲せんずの勢を示して居るではないか、世界戦史にもかつて見ざるこの業績は、確かに人間業ではない、外國武官が神業と驚嘆したのも正にその所以である。

日本兵も人間である。然るに神業といはれるほど何故日本兵は強いのか、いふまでも無く萬邦無比なる我が國體の尊嚴と君の爲、國の爲には一身一家を犠牲にして顧みざる我が國民精神の然らしむるところである。お互の血管に脈々として波打つ日本人の血、然しそれを検討することは、今日の私に與へられたる課題ではなかつた筈だ。

×

秋もいつしか半を過ぎた。樹々の葉も既に色づき、朝夕は拾の肌にもウスラ寒さを感じしめられる。北支那は多の訪れも早からう、山岳地帯には雪が降つてゐるかも知れぬ。馴れぬ土地、馴れぬ氣候、その中にあつて困苦缺乏に堪へ、敵身の努力を重ねつゝある我が將士、私共にあるものは唯々感謝、感激の涙である。

然し黎明は近づいた、伸びゆく戦火は克服され、やがて東洋に平和の曙が齎らされるであらう、私はその日を待望すると共に無量壽の御名によつて出征將士の武運を心から祈念するのであつた。

髪髯が大分延びてゐた。心持ち青白いお顔も私たちの突然の訪れに多少紅潮を見せてよろこんで下された。話が長びいて熱を出される様では、と心配しながらも、つい長々と話込んでしまふのであつた。談たま／＼「空」に及んだ。「浄土」の六、七兩月に先生は「空」について説かれたのであつたが八月その完結を見ずに轉地された。

そして病床を最初に見舞れたものは、傳通院貫主木村僧正の「空」の書であり、大正大學教授大野法道師の「空」の論であつた。最近又特に親交ある京都の萬里小路子爵から「空」の書が送られて教界の佳話として傳へられた。

寓居の一室は「空」を以て充たされた形である。「空」を説く事は説いても、體得する事は難かしいよ」と淋しく語つて先生は疲れを休められた。学校の事、會の事、教界將來の事等、色々御心痛の事であらう。

今更先生の病を沁々と悲しく思ふ。一日も早くもとのからだになつて、活躍される日を、そして「空論」を新しい感覺の上から説かれる日を千秋の想ひで待ちこがれる。



人 間 の 涙

生 田 花 世

此頃の新報での記事からの印象は、支那各地に於いての、日本人の涙、男の涙だ。

今日も「満身創痍の水兵、群る敵を撃退、部隊長、擔架で見舞ふ」といふ標題のもとに上海北四川路克明里附近で、唯一人勇敢にも前線に飛出し、三度傷き仆れて、三度敵を撃ち、つひに、前線の敵を後退せしめた辻川義邦一等水兵の事を報道してあるのだが、その終りに

「お前一人で完全に撃退した、有難う」
「さうか、みんな變りはないか」

自分の身よりも戦友を案ずるこの床しい心情に一同は泣いた、とある。

つづけて、

三十日の攻撃戦に重傷した宮崎部隊長は、野戦病院から擔架に乗つて、瀕死の辻川水兵を見舞ひ、共に相抱いて泣いた、とある。

泣かずにはゐられない至情の場面が、北支上海の戦場を綴つてゐるので、記事をよむ者も亦泣かされて了ふ。

「さうか、みんな變りはないか」

この死生の間に立つての、仲間への愛情は何と高い感情であらうと思ふのだ。

戦友！ この二字の中にふくまれてゐる感

激は、安危をともしする特殊状態のもとにのみ集結させる血盟の情をこめるものだときく。

私はその事を、今私の家にゐる従弟から聞いたのである。數日前、天津北方地帯の警備についてゐる兵隊さんから、従弟のところへ軍事郵便がついた。黄いろい小封筒の中に、小型のレターペーパー、それは東京のお店の名がついてゐるから、慰問袋の中のものだつたらうと思はれる。

従弟の讀んだあとで讀ましてもらふと、「戦友殿」「戦友殿」と書きつづけてゐるので、

「あんたも、この人に手紙を書くとき、こんなに戦友殿と書く？」

「ア、みんなさうだ。さきになつて、この男が、東京へ僕を訪ねて来るなら、やはり、戦友殿といふよ」

と云つた。

その説明するところによると、同時、同地で、敵弾に、生命をさらしつつも、戦友と一緒だと思ひ、どんなにならうと一人ではないとおもふ仲間の氣持がたまらなく、涙ぐましく、感激的なものだといふ。

私の従弟は、去年まで天津に駐屯兵としてゐたものであるが、今度はまだ應召に接してゐない。

新聞を見て、わからないところが出て來ると説明してもらふので、私はいろいろの事を知つた。

「覺悟は出來てるんだから、行け、行けつて調子で、愉快でさへもあつて、自分の力以上の事も出来るよ。まつたく、不思議ですよ」

こんな事も云つた。

二

云つて見れば戰場淨土といふやうなものであらう。

いつ死んでもいい、どうせ死ぬならいい死に方を、武勲を立てての死に方を、戦友のために役立つ死に方をと、それ一念に考へるので、辻川水兵のやうなものも出て來るらしい。「當人は緊張してるから、死んでも、傷いても、ある張り合がピンピンあるんだ」

と、従弟は教へてくれた。

私は又、新聞をひろげて、涑源城一番乗り三勇士の寫眞を見る。城壁にやもりのやうにとりついて、ロッククライミングよろしく、よちのぼる三人の兵隊のその頭、胴、臂、脚すばらしく張り切つてゐてうつくしい。

私は戦争禮讀者ではないが、兵隊さんに對しては、同胞としてのあらゆる支持と感激を持つものである。又、兵隊さんの行動からは

實にいろいろの事を教へられる。

戰場は人間の泣くところだ。大將も泣き、部下も泣く。しかし、新聞をよく讀んで見ると、その涙は、嬉し涙、感激の涙であつて、悲しみの涙ではない事である。「心細い、

「困つた」、「つらい」、「なさけない」かく思つて流れる涙が、日本人の戰場には、絶対にない。だから、軍人の涙は陰氣でない、それが、美しく武威をうるほはせてさへもゐる。

涙といふ事について考へると、私の経験でも、思ひがけず嬉しい時に、バラバラッとおちる。

瀕死の辻川水兵を見舞つた宮崎部隊長の涙は、必ずやこんなえらい働きをしたものが自分の部下だとおもふ嬉し涙であつただらう、又、辻川水兵は、上官が涙を流して喜んでくれるのが嬉しくて泣いた事であらう。

怒りや、憤りや、悲しみは、一寸考へると泣けさうでゐて、實際は泣けないものだ。涙線が氷結したやうになつたり、感情の埒外

にされたりする。

極端な悲しみなど特にさうだ。今年、私の知人で十九歳の長男を病氣で失つた人があつた、この人は

「涙なんか出ませんね、何にかう腹が立つてゐるのですよ……」

とその當面の實感をしらしめてくれた。

この父の場合とは少しくちがふかも知れないが九月十九日、南京空襲の歸途戦死確實となつた岡島威大尉の父君は、新聞記者に次のやうに云つてゐた。

「今、戦死の報を得て、我子によく死所を得たと思ふ……私は泣かない、この通り泣かない、あいつは兵學校に入學する時は、手をとつて、わしが、代數でも、數學でも教へてやつた」(下略)

この岡島少將の談は、私に深い感動を與へたが、この涙の出ない心境の中には、武人としての父自身の満足が多分にあるやうである。もし、萬一、この岡島大尉が、敵地に不

時着をして、捕虜にでもなつた事が知れたら、この岡島少將は、口惜しがつて、泣くにちがひない。

「この通り泣かない。」とくりかへす岡島少將は、嬉し涙以上の泣く言葉をのべた。

「あいつは兵學校に入學する時は、わしが手をとつて、代數でも、數學でも教へてやつた。長じてからは、よく一緒に酒を飲んだものだ。實際よくやつてくれたと思つてゐる」(下略)

これが嬉し涙そのものといつてよい言葉として、私達の感涙をさそふ。

實際、今度の戦争で、私達の注意をひく事は、戦死者の遺族が、お役に立つたので満足だから泣かないといふ事を特筆報道してゐる事の多いのと、又、遺族自身さうである事と戦場の上下のものが、よく泣く事だ。生還を喜んで、感激して泣き、悲壯な武勲に心打たれて泣き、戦友の情に感謝して泣いてゐる。悲しみの涙、消極的な涙、陰鬱な涙を頬に

流すのは人間としては小さく低い。

私たちは、生き切る事に伴ふ涙を、とどめる必要がない。うれしい時は泣け、有難い時は泣け、泣けば勇氣が二倍となる。

保定の城にたゞ一人ゐたといふ長崎縣浦上生れの日本婆さんが、お天子様の兵隊が見られたといつて「謝」「謝」と叫んで泣きやまなかつたといふが、かうした涙こそ、法涙のそれにひとしいものであらう。かうした立場の彼女には日本兵隊の輝かしい行列の、その軍旗の上に菩薩のみ姿を見たであらう。

口惜し涙で泣いてゐるかとおもはれる戦敗者の涙、戦勝者のよくこそ勝てた！とおもふ嬉し涙、ともに人間の最後、もしくは至極のものだ。

私たちの待ちかねる東洋の平和、が、かうした涙の中で培はれて行くのだとおもふと、私はこの人間の二種の涙への指導を、佛教界の人々のお力により、更に淨化される事を切に期待するものである。

信 仰 相 談

…中村辨康師擔當…

(本欄への質問はハガキに住所氏名御明記の上信仰相談係宛のこと誌上匿名は可)

埋葬に就て

問

埋經に就ての文獻、由來、並に如何なる方法で行はれるか御解答を願ひます。(市内神田池田靜)

答

埋經と云ふ意味がよく判りませんからもう一度委しく御申越し下さい。埋經の時に讀む御經の事ですか、それとも土葬の事ですか。若しそれですと、印度などでは古くから土葬、棄葬、火葬、曝葬の四種の葬法のあつたことが「阿闍婆吠陀」第十八に出て居るさうです。また「立世阿毘曇論」には火葬、水葬、土葬、林葬、鳥葬、などが誌されてあるさうです、此中の土葬が即ち埋葬のこと

とありますが、印度の佛教では火葬を正葬と致しました。また支那では冠婚葬祭を大禮として居りましたから葬を厚くするのは當然なのですが、概ね火葬よりも埋葬をよしと致しました。處に依ては火葬をよしとする風習もあるさうです。佛教で葬儀の時御經を讀むのは何時頃からかはよく分りませんが、支那で「百丈清規」と云ふ禪宗の書物に「念誦、大悲呪、楞嚴呪」を唱へて回向する規定や、其他色々な飾り物をしたり讀經や焼香したりする葬送の次第が委しく記してありますから其頃はもう餘程葬法が發達して居た事

が判ります。我國では古くから土葬で、文武天皇様の頃始めて道照和尚を火葬にしたと傳へられ、漸次に火葬することが弘まつて行つたらしいです。類聚雜例には後一條天皇様奉葬の式次が記されてありますが、御經なども讀まれたやうであります。葬場など立派に飾られたやうであります。そして室町時代

には一般庶民も葬場を設けて、現在行はれて居るやうな葬儀が執行されたらしいです。徳川時代になつてから四門のついた臺を用ひ之をかついで葬所に送る風が生じたのは略式になつたのだと云ふことです。讀經の法式は宗派で多少の異りがありますが申し上げるまでもないでせう。

正統か異流か

問

當地は眞宗の繁昌地、到る處に御説教があります。或る有名な講師様が「我が眞宗こそは絕對他力の宗旨で法然上人の御正統であり、鎮西派や西山派は上人の御心と異背して自力が交つて居る云云」またよく「信の座行の座」の御話をもちかましく云はれますが、あの話などは本當な

のでせうか。私は淨土宗の檀徒ですが眞宗の眞中に居て困つて居ます。また私は「一枚起請文より外にはない」と獨りで喜んで居ますが「あれは鎮西派だ」と云はれて困まつて居ります。(福井市外一信者)

答

眞宗と淨土宗との問題は度々出る御質問で、實は私も御返事に困つて居る

信 仰 相 談

のです。もう既に數回ほどかうした御質問に答へて置きましたから、大概で御許しを願ひたいものだと思ひます。

たゞ正統か正統でないかと云ふ問題は其宗旨を立てる上に、ある何かの分派である以上は「何れも正統なのでせう」と申上げる方が、恐らく公正の御返事だらうと存じて居ます。立教開宗の上で「私の方は正統ではありません。邪流であり異流であります」とは云ふ筈がないからです。恰度「みすや針」を賣る店が何れもこれも「本家」とか「元祖」とかを名乗つて居るやうなものです。また宗を立てる上に於て多少他と異つたものがないと別立の意義をなしませんから、相異點のあるのは當然で宗義上「自分の方こそ一番上等だ」と云はなくてはなりませんし、亦た信仰する限り本當

にさう思ひ込むのが當り前です。だから夫々の立場が異つて居りますので、其立場に立つ時、夫れが正しいと考へるのは當り前です。西洋人に取つて東洋は東でありますが、東洋人に取つては却て西洋が東にあたることも云へるのと同じ事です。

また「信の座行の座」の問題は「拾遺古德傳」に出て居る話ですが、今では全く問題にならぬことでつまらないものです。念佛を離れた「念佛の信仰」もなく「念佛の信仰」を離れた「念佛」もないのですから、若し法然上人の門下が「信の座」と「行の座」に分れて坐つたとしても、恐らく法然上人は何つちにも加擔しなかつたでせうし、むしろ御叱りになつたことでせう。全く子供だまし見たやうな話です。無論後世添加されたものに相違ありません。

また「一枚起請文」は眞宗でも決して度外しては居りません。昔しから眞宗の學者がかなり澤山に此の「一枚起請文」の講話を書いて居られるのでも御分りでせう。唯だ一宗派宣傳の爲に事實の「眞相」を暗くしよ

うとすることは悲しむべき事ですし、自我固執の爲に他を誹謗することは最も忌むべき事です。一體「眞宗」と云ふ名は徳川時代から起つた事で、元と「一向宗」と云つて居たのですが、徳川中期になつて「浄土眞宗」と改稱したいと幕府へ願ひ出たところ、浄土宗側から故障が起つて「一萬日の預り」となり有耶無耶になつて居たものです。だから徳川時代までは「眞宗」と申しませんでした。それが明治時代になつて各宗に管長制度が設けられるやうにな

つて、初めて「浄土眞宗」と公稱することになつたもので、ずつと已前は浄土宗を「浄土眞宗」とも云つて居たものであることは、京都の黒谷の山門の額を御覽になれば直ぐ御諒解出来ることとせう。

また「絶對他力の宗と自力が交じつて居る宗」との比較論も、念佛の信仰に自力が交つて居るか何うか。他人の信仰を勝手にきめるのも少し越權ではないかと存じますが、法然上人の「自力他力」に就ての御法語を御覽になれば直ぐ御諒解になれることと存じますし、そして既に此欄でも度々申し上げた事ですからそれを御覽願ひたいと存じます。

本欄への御質問は楷書で明瞭にお書下さい。不眞面目な投書は一切御答へしません。



おはなし

不思議なお母さん

松原敏夫
野水昌子 畫

「どうしておかあさんは、なんでも知
つてゐらつしやるんでせうね。わたし
たちが、どんな悪いことをしても、お
かあさんには、すぐにおわかりになる
のね。」

洋子ちゃんが、おねえさんの絹枝さ
んにききました。

「私にもわからないわ。『ちゃんと、顔
に書いてあるんだよ。』と、いつも、お
つしやるけど、顔なんか、なにも書
いてないわね。」

二人がこんな話をしていると、ちよ

うどおかあさんが、二人をお呼びにな
りました。

二人は、おそばに走つていきました。
「市場へ行つて、おじやかと玉ねぎを
買つて来てちょうだい。こゝにお金が
あります。急いで行つてくるんですよ、
みちぐさなんかしないで、まつすぐに
かへつて来るんですよ。」

おかあさんはいつて、絹枝さんに、
藁口とふろしきをわたしました。

二人は外へ出られるので、大よろこ
びで出かけました。いそいで行つたの

で、すぐに、市場につきました。

八百屋のおちさんから、じやがいも

と玉ねぎを買つてしまふと、

「早くかたづいたわね。」

絹枝さんがいひま

した。

「あかあさ

んは、こ

んな



に早くかへるとは、お思ひになりませ

んことよ。ねえ、一分か二分、遊んで

行かない？」

「では、ほんの一分間ね、その位なら、

おかあさんにも

わからないわ。」

そこで二人

は、一分間、お

菓子屋の前に立

ちどまることに

しました。そこ

には、キヤラメ

ル、ドロツブ、

おまんぢう……

二人の大すきな

ものが、いつば

いならんでゐま

した。五分間は

十分間に、そし

て十五分間に

二人はいつまでも動きませんでし

た。

「ちよつと——あのチョコレートチョコレートの雞

絹枝さんがいひました。

「だつて、お金がないでせう。」

「いえ、おじやがも玉ねぎも、おかあ

さんがいつていらしたより、やすかつ

たのよ。おかあさんにわかるもんです

か。」

「さあ、どうかしら、でも、あのお菓

子は、とてもおいしさうね。買ひませ

う。」

絹枝さんはお店に入りました。さう

して、チョコレートの雞をもつて、出

て來ました。二人はそれを分けました。

食べながら、おうちへかへりました。

「あら、たいへんよ。洋子ちゃん、あ

そこの時計を見てごらんなさい。あ

なにおそくなつたわ、かけださねばだ

めよ。」

二人はむちうになつてかけだしました。ふくれたふろしき包みをもつて、

おうちへとびこみました。

「おかあさん、おそかつた？」

絹枝さんは、ふろしき包をわたしながらいひました。

「も少し早く、かへれたはずですよ。」

おかあさんは、おつしやいました。

絹枝さんは、ちよつと顔を赤くしながら、

「おじやがをはかるのに、とてもまどつたのよ。」と、いひました。

「それで、おそくなつたの？」

「ええ。」

二人は答へながら、下をむきました。

なんとなく、よいきもちがしなかつたのです。

一時間ほどたつて、晝ごはんになりました。二人はチョコレートを食べ

て、おなかがくちかつ

たので、いつものやうに、よろこんでは食べ

ませんでした。

「わたし、こんなおかすはいやだわ。いつも同じですもの、じやが

いもに玉ねぎ、玉ねぎ、

とじやがいも……」

「おかあさん、いつかごちさうしてやるとお

つしやつたけど、いつ

してくださるの？ わ

たしも、こんなものに

はあきちやつたわ。」

洋子ちゃんもいひま

した。おかあさんは、

二人の顔をじつと見て

いらつしやいました

が、ごはんがすんだあ



とで、

「おまえたちは、町で何を食べたの？」
と、おききになりました。

「なんにも食べませんわ。どうして、
そんなことおつしやるの？」

絹枝さんは、さもおどろいたといふ
顔をしていひました。

「うそをついてはいけません。おかあ
さんは何もかも知つてゐますよ。」

二人はまつかになりました。

「市場で遊んで来たんでせう、そして、
あまつたお金で、何かあまいものを買
つたんでせう。」

おかあさんは、やさしいが、まじめ
なこゑでおつしやいました。

「どうして知つていらつしやる？」洋
子ちゃんがききました。

「ちやんと、おまえたちの顔に書いて
ありますよ。」

「うそよ、顔になんか書いてありませ

んわ。誰かにおききになつたんでせ
う。ねえおかあさん、ほんとのこと
を、をしへてちょうだい。」

絹枝さんがいひました。

「つげ口する人なんか、誰もありませ
ん。……ほんとはね、おまえたちがを

しへてくれたんですよ。第一、市場ま
で行つてくるのに、あんなに時間がか

かるわけがありません。第二に、いつ
もは、ひるごはんをおまちなだのに

けふにかぎつて、ぐづぐづいつて、ろ
くにいたゝかなかつたでせう。……そ

れからね、おまえたちは、おかあさん
の顔を、まつすぐに見ることができま

せんでした。さつきかへつて来た時か
ら、おかあさんには、ちやんとわかっ

てゐました。」

ふいに、二人の顔を、あつい涙がこ
ろびおちました。

「あゝ、おかあさん、わたしたちは、

これから、けつしてうそをいひません
わ。どうぞ、ゆるしてくださいね。」

二人はなきながらいひました。する
とおかあさんは、ハンカチで二人の顔

を、やさしくふいてくださりながら、
「いゝことよ、ななくつてもいゝこ

とよ。これから、うそをいはねば……」
と、おつしやいました。

赤ちゃんのひきつけ

急に赤ちゃんがひきつけた場合あわて、抱
き上げたりしては却つて危険です。だつこし
てゐた時でも引きつけたらおろして着物やお
びをゆるやかにしてやり、すぐお医者さんを
呼ぶ事です。醫者が急に間に合はぬ時はリス
リンと水(五瓦づつぐらひ)を等分にしたもの
で灌腸をして手あてしなければなりません。

決しておどろいたりなどして取り返しにつ
かぬ事をせぬ様注意すべきです。

短歌

興謝野晶子選



一等 山口 長岡 見地

車窓より半身を出し旗をふり出征の士がわれ等に答ふ

(評) 征戦に立つたを送る際には誰れも皆悲壯な興奮状態になるものです。その送られる人々も同じ程熱心に旗を振つて應じてくれた時の感激がよく現れてゐます。

二等 小 樽 中村 もん

燈臺の灯は大海を三五夜の月はみ空をてらす秋かな

(評) 中秋の月を新しく眺められた實感が現はれます。

三等 朝 鮮 末光 一味

故酒井少佐を憶ふ

おん前に追叙の辭令供へつつはげしかりけんみいくさ思ふ

(評) 故人の勳功を思ふと共に忘れ難い追憶の情もあるでせうが、其れを下に抑へられた所が見えます。

千葉 高橋美矢子

口を染めたりもろこしを食める子の裾をも吹けり秋の夕風

小 倉 益田 山 査

屋根越しに見ゆるボプラのそよぎつつ日影いつしか秋となりけり

京 都 日 野 碩 雄

月の良き夜なりと出でて端居する法師の君を秋風の吹く

北 海 道 花 田 順 往

生き死にの境を越えて皇軍に従ひ行けと子を囑ましぬ

鹿 兒 島 兒 玉 扶 美

待ち侘びし雨に濕ひ大根ども黒き土より出づる朝かな

名 古 屋 長 谷 川 貞 音

久々にわれ訪づれて山寺の白き芙蓉に逢へる秋かな

東 京 喜 代 子

急ぐ身も一針ぬひぬつはものの彈

のまもりに送るとききて

京 都 郡 司 島 誠 也

なつかしや生栗かめば故郷の山に遊びし昔おもはる

大 和 一 尼 僧

夏の夜の蛙の聲をききながら亡き父母のことを思ひぬ

大 阪 小 山 文 二

驕慢の人とありつつ憤りえ堪へぬ時はみ名をととなへん

新 宮 奥 村 映 水

貝採りの船を造りて秋晴れの熊野の海に漕ぎ出づるかな

愛 知 近 藤 眞 孝

われを撫で愛で語られしおほははのおん目を思ふ極送る日

兵 庫 西 島 春 人

降り止みし庭の梢に月照りて玉をつらぬるは美しきかな

東 京 通 名 氏

煙仕事終へて歸れるたらちねを門邊に待ちしむかしこひしき

京 都 永 田 七 郎

忍ぶより外に道なきわが世とて堪へつつ行けば強きに似たり

朝 鮮 羅 江 廣 吉

合掌の思ひに心みたされてたゞほほえみぬ病臥してわれ

朝 鮮 八 年 坊

秋は來ぬ大空高くさわやかに飛び行く雁の一群の影

徳 島 神 原 梅 華

吾が宗祖の慈恩のこもる念佛は愁ひに曇る心てらせり

倉 敷 橋 江 史 枝

朝夕のつとめとなりぬまづ支那にたたかふ兵の上祈ること

久 留 米 佐 藤 南 安

秋の來て松の風のみ寂しけれ大なる濱人影もなき

東 京 三 野 輪 江 雪

避暑客の去りてさびしき今朝の濱磯波あれて鴉あそべり

歌壇・俳壇投稿規定

歌壇、俳壇への投稿は一回各三首づゝとし、官製ハガキに楷書ではつきりとお書き下さい。浄土編輯内各係宛のこと。

一・二・三等當選者へは記念品を御送りすることになつてゐますが、從來の當選者で御送附洩れの方は至急その旨御申越願ひます。

☆ 佛 ☆ 教 ☆ 常 ☆ 識 ☆

先達て前の文部参興官であつた作田先生に御目にかゝつて色々「淨土」に就ての御高見を承はつた中、佛教語には難解のものがあるから、一般讀者の爲に「佛教常識」を得らるゝやうなものを毎號載せては何うかと云ふ御意見に従つて、此欄で時時、一般に使用される佛教語の解説を書くことにしたいと思ふが、少しでも讀者諸君子の御参考になり得れば筆者としては幸甚である。若し御希望の方ははがきで御申越しを願ひたいものである。但し一般的なものから先きになりたいと思つて居る。(擔當者)

◎ 三 界

三界とは、一に欲界、二に色界、三に無色界を云ひますが、その名が示して居るやうに欲界は生きる爲に必要な欲望の世界の事であり、色界とは色や形のあるもの即ち私達の目で見、耳で聞、手で觸れる人間生活の周圍にある物質界の事、無色界とは色や形のない精神現象の世界の事です。以上は至極大雜端の説明ですが、更に細分しますと、總じて四十

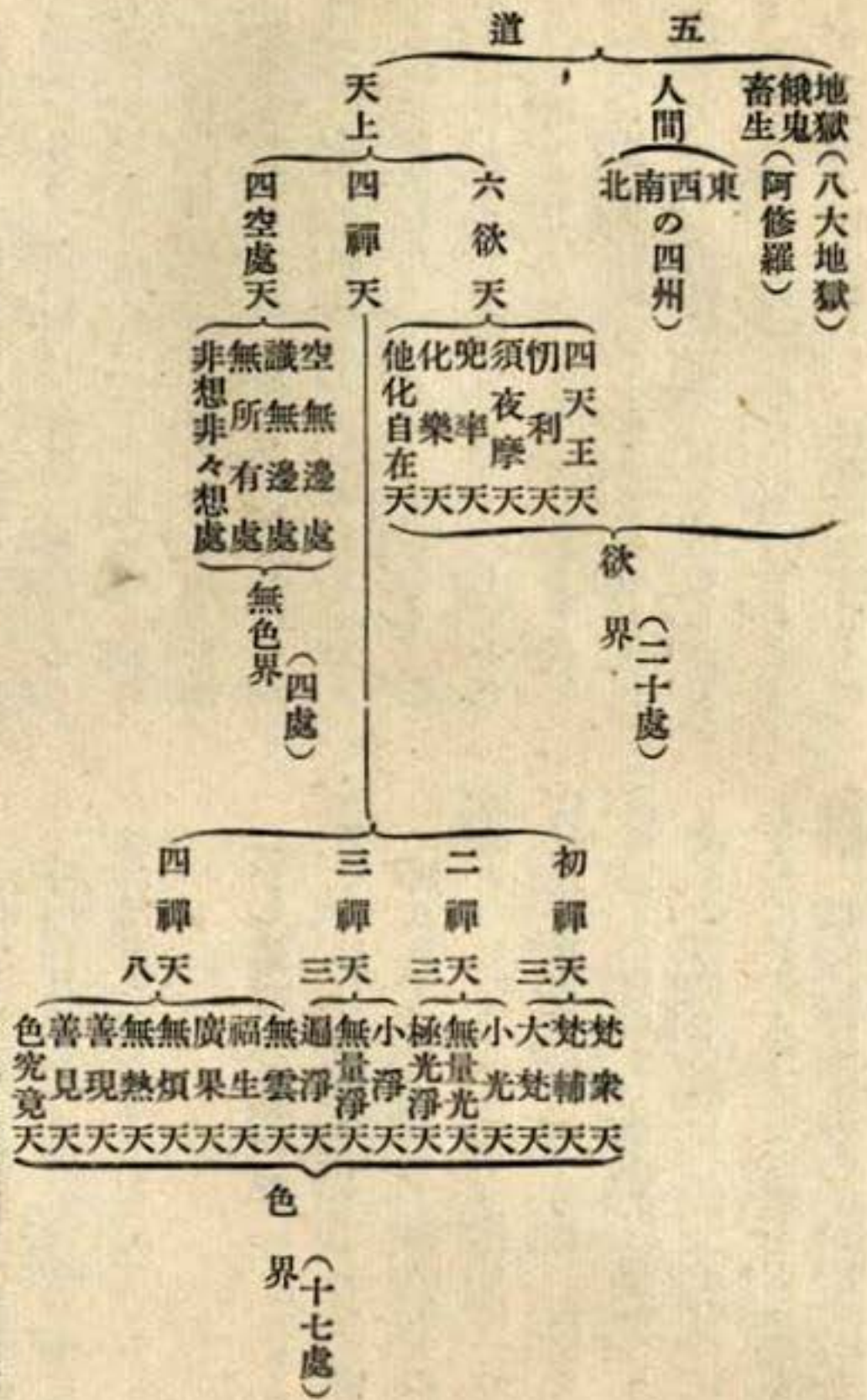
一界となります。

之には色々な印度の傳説や神話が附隨して名前が取り入れられ、數が多くなつたのですが、簡単に申し上げますと、先づ欲界に就て、

第一の地獄界は 極苦の世界で、八

大地獄と云ふやうに八大別されます。即ち時時ホツと息のつまる苦しい生活を「等活」、苦の纏でしばられて居るのを「黑繩」、苦が重なつて來るのを「衆合」、叫ばざるを得ない苦しい生活を「叫喚、大叫喚」、宛かも身を熱せられるやうな苦しみを感ずる「燒熱、大燒熱」、苦し

みの間斷なき生活の「無間」と云ふ類の、つまり人間苦の最大なるものに名付づられたものですし、第二の「餓鬼」は正法念經には三十六種を擧げて居ますが、要するに慾望が極めて多く、食りのみを以て生活して居るものことです。次の畜生は俗に獸類鳥類にも名付けられて居ますが、傍生とも翻譯されて居りますやうに、歪められた生活、正しからざる生活を意味する非人道非道德の欲の爲に殺し合ひ噛み合ひいがみ合ひをするものの事を云つたものであり、次の人間は通常一般の人間生活ですが、それにも東西南北の四州に依つてその性質の異つて居ることが示されて居ります。北方寒帯に住む人と南洋熱帯に住む人とは風俗も習慣も違ひますし、亦た西洋と東洋とも大きな相違のあることは云ふまでもないでせう。でも大體一般的な人間生活は謂ゆる五欲生活(食欲、性欲、睡眠欲、財欲、名譽欲)で、國の相違民族の相違はありませうとも、人間として約束付けられて居るのは五欲です。次には此五欲とは少し異つた欲望も



ありますので「六欲天」と云ふものが擧げられて居ます。即ちそれは「樂をした」と云ふ氣持の人達のことです。其中で第一の四天王天は何時でも主家の買ひ殺しになつて居やうとして居たり、或は他の用心棒になつたりして居て、自分で獨立する氣概がなく謂ゆる寄り懸り主義の人達のことであり、第二の忉利天は三十三天ありと申しますが、總じて云へば、歡樂極まりなき生活を要求するもののこ

とであり、第三の須夜摩天即ち夜摩天は善時天又は時天とも譯され隨時に樂しみを得ようとするものを云ひ、第四の兜率天は喜樂天とも云ひ歡樂飽滿して知足を知らないもの、第五の化樂天はそれよりも輪をかけたものであり、第六の他化自在天は他の一切の歡樂を自由によりがものと化す歡樂の最上を云つたものであります。この六欲天はつまり積極的な進取果敢な氣持がなく「樂」をすることのみ

を以て人生最上の幸福なりと心得て居る人達の事です。以上はいづれも欲を中心とする生活の分類ですから之を一括して欲界と名づけたのです。但し此中に阿修羅と云ふのが抜けて居りますが、之は元は五趣とか五道とか云つて入れてなかつたのです。ところが惡に三種、善に三種と分けるとき、五種では一つ不足する爲に「阿修羅」を加へるやうになつたもので、實は其正體がハッキリしないのです。或説に依りますと「存在す」と云ふ語根の「在」が名詞形となつて「在」となり呼吸又は靈魂を意味するやうになつたが、それへ接續字の「加」が添加されたのだとも云はれて居ますし、印度の古典「梨俱吠陀」の中には「最勝なる性靈の義」に用ゐられ、古くは忉利天や火天や水天などの名稱にも用ゐられて居たさうですが、中古から「畏るべき神」と云はれるやうになり、それから段々説話が生じて日蝕や月蝕は此の阿修羅が身を大にして日や月を覆ふからだと云ふやうな話やこの阿修羅の吹く息が彗星になると云ふやうな話も出て來たとも

申します。そして其戸籍は第二の餓鬼道の中にも第三の畜生道の中にも屬して居り、或る場合には天上にも登つて帝釋天と戦争ばかりして居るから「非天」とも云ふなどとも云はれて、何うも少し浮浪性を帯びて居る状態です。すから、古い處では之をはぶいてあるのであります。

次に色界は

欲を離れた世界として大體四區に分ち 第一區は「梵」即ち清淨なる人の世界を意味し、第二區も「光」即ち穢れ

なきを意味し、第三區も「淨」の充つる世界を意味して居ります。随つて其結果として第四區の八處が暗雲もなく、幸福であり、廣大なる結果が得られ、煩ひなく、苦熱なく、善が現はれ、善が到る處に見られ、そしてそれらの究極にまで達し得らるゝ事を云つて居ますから、此状態を私達のすむ世界の中で探して見ますと、大體科學研究の世界に當る譯です。即ち生活欲を離れた學問研究の世界こそは清い世界でありますし、其研究の結果とし

て色々の文明が生まれ、諸機械に醫學に産業にあらゆる文化が進められて人類の幸福が將來します。そして此の世界は前の欲の世界と違つて全く平和であり長閑であります。然しそれには謂ゆる「天人の五衰」が附隨して來ます爲に、まだまだ眞の幸福とは云はれません。つまり研究に依つて色々文明の利器が發明されましても夫れから夫れへと漸次に發達したものが出來て來ますから、一時は花と咲き光りと稱へられても、やがて凋落の憂き身を見なければならなくなるからです。

然し第三の無色界

になりますと、

物質を離れた精神界の事です。苦樂を超越して居ります。之は形而上學的研究の世界に該當するものであります。即ち第一の空無邊は私達の我欲執着に對する第一否定ですが、其否定した處にまた精神的執着が残りますので次ぎの識無邊を觀じて第二段の否定を致しますが、其處にはまた眞理を固執する第三の執着を生じますので次ぎの無所有と云ふ「所

有する無き」大悟の境に達しようとしすもの、さうなると謂ゆる「虛無主義」に墮して本當の人生を完うすることが出來ませんか、第四の「非想非々想」と云ふ即かず離れずの眞中をねらつた生活態度を取ることになります。そこに至れば先づ精神生活の最上となるので、この非想非々想天を以て最上最高最極と云はれるのであります。

だが考へて見ますと、それで何うだと云ふのでせうか。それで本當に「魂の問題」が解決されたと云ふのでせうか。イヤさうではありません。それは唯だ一つの理論を得たと云ふ丈であつて、いくら最高である「無色界」にしても色界欲界を離れた生活はあり得ませんし、また單獨な「無色界」や「色界」もある譯がなく、皆な生活の基礎を「欲界」に置いて居るのですから根柢がぐらついて居る譯です。

だから「三界は猶ほ火宅の如し」と云はれて居る理由が納得されませう。



特別懸賞當選小説二等

洪 水 異 聞

梅 澤 義 明

行 々 子

雨は幾日も降りつづいた。

夜も晝も小止みなく車軸を流すやうに續けざまに降つた。村の人達はこの不可抗な自然力に對してどうすることも出来なかつた。

「豊吉さん、今日も雨だぜ。」

村外れの作兵衛の家でも、庭の雨水が臺所まで流れ込んで来る始末だつた。

「良く降る雨ですなあ。」

然う云うたのは歴とした江戸辯だつた。年頃とは三十近くにもなるか、色淺黒く、鋭い眼をしてゐた。それでも何處か親しみの持てる

人懐い眼だつた。笑ふと眞白な齒が綺麗だつた。堅氣のやうにも思へるし、さうでもないやうなところの見える男だつた。その男は靜かに口を開いてゐるのだつた。

「私が此の村に變な事から流れ着いてから三年、その年毎に洪水でしたねえ、その度毎に私はあの夜の事を思ひ出しながら命の親の父ツさんの片腕として、何時も水入りを防せぎやしたが、毎年不思議に堤が切れ、私は何時も父ツさんと二人で村の衆と此の村は切れても隣りの新川村は切らさねえと飯も食はずの水番でしたが、今年もどうやら然うなりさうでござんすねえ。」

「本當でが、あす、豊吉さん、儂もこの六十五の今日までこの村に生きて來やしたで。それでその六十五の半分の三十年でもなあ、水入りの年でがあした。儂ばかりの事ぢやねい。儂等の親父もその親父もそのお袋もみんなかりした苦勞をして來たんだ。今年も又豊吉さんに一骨折らしひもらひますべえ。」

然う云ふ作兵衛には昨日今日みつきり元氣がなかつた。

「父ッさんも此の頃急に年がとつたからにや、村の衆にも馴れた私だ、一人でなんでもやつてみせますぜ、あの時死んだ奴と思ひや、父ッさんの事なら火の中でも水の中でも飛び込みやすぜ、今から三年前、早いものだ。あの時、隣村の芦屋の村の辻の甚蔵親分の賭場で、賭場と云つても昔と違ひ、御維新間際だ。さびれた賭場だつたが、私のイカサマが曝れた途端に案外腕節の強いのが居やがつて、實卷にされて江戸川へ投げ込まれたものゝ死んだと思つた私が、その夜網を張つてた父ッさんに救はれて、氣の付いた時にや父ッさんと

お才さんがその勝手元から、『氣が付きやしたか』て駆け込んで來て下されやしたつけ、それからと云ふもの、昔と違ひこれから新しい御時代様だと父ッさんが心から悟されやして、やくざの足を洗ひ、鋏を擔いで百姓の眞似事、夏になりや、きまつて水の中、あれからよつぽど水に縁があると云ふもの、今年はどうにか素直に過ぎて呉れめいか、と洪水神へ祈つて居りやすが、この分ぢや何時もの年より凄さうですなあ。」

然う話してゐる間も軒を打つ雨の音は増々高くなるばかりだつた。

「然うとも、然うとも、あれからお前さんの心掛が良いもんだで、どうにかかうにか百姓様になつたものゝ、やつぱり百姓言葉は使へねえ、それまた豊吉さんの良いところだで、水入りも後十日と経たぬ中だんべいが。」

豊吉にはこの作兵衛が何故か親父のやうに思へてならなかつた。親の顔も知らない彼であつたが、この水村で初めて親を得たやうな氣がして、一生懸命作兵衛の娘のお才と一

緒に百姓に働んだ彼であつた。この村に生れた彼でないにしろ、丹精込めて作つた、稲も畑の作物も水の下にされるのを見ては、たつた三年の生活であつたが、此の村の人達の悲しみを想ふ時、自分も作兵衛父ッさんの後を受けてきつと水の入らない住み良い村にしてみたい。若者らしい自然へ對する憤怒と反抗とが潮の如く彼の體内に沸き躍るのであつた。それだけに彼は他國者と云はれる辛さも忪へて、行先きのない彼だけに、この土地で骨を埋めても良いとまで決心してゐる彼であつた。

「父ッさんで、では行つて來やすぜ。」

「さうかい。大變でがあすなあ。」

豊吉はやがて蓑を着て鋏を手に取ると、駆けやるやうにして水番をすべく堤へ走つて行つたものゝ、空腹の爲に何時しか足が動かなくなつた。草に置かれた雨を吸ふと、又思ひ出したやうに雨の中を急いだ。

村の人達は梅雨以來の霖雨であれば、水村

であるが故に、祖父も、その父も、その母もずつとその前の人々の時から運命づけられた洪水、只それのみが弱い人間の恐怖となつて、老人の胸にも、幼子供の胸裡にも、眞黒な影となり悪魔の姿となつて激しい戦慄きの中に去來するのだつた。日一日と村人の不安を募らせつゝ、その雨は村の田といふ田、畑といふ畑、總べてを水の下にしてしまつた。飢ゑが既に彼等に大なる悲劇として襲ひ掛つてゐるのだ、そんな事かも知れぬ氣に無情なる天は、やはり篠つく雨を次ぎから次ぎへと降らしに降らすのだつた。

雨降る儘に八月に這入つた或る日の事だつた。作兵衛は娘のお才も、豊吉も居ぬ家の中で唯一人何する事もなく、襲ひ来る不安を老の身に感じてゐた。ハツと雨戸の隙間から空を見上げた作兵衛は、

「ウン、雨が止む、これからだ、川の危いはこれからだ。」

獨言のやうに呟いた聲は哀れな程寂しかつた。

するとその日の午下る頃より雨が小降りになつた。と、一月近くも雨を降らした空に明るい色が射し初めた。雲が烈しく流れ出したと思ふ間もなく、地平線の黒味を帯びた彼方に些と一點の光線が照り返した瞬間眼に入る光景が俄然として變化を來した。紫色の雲が白ツちやけて來た。時が流れて何時とはなしに黄昏の頃になると、一條の陽光がスウーと西の空から眞直にこの村を射た。忘れてゐた太陽が薄紅い光のない色を見せると同時に謎のやうに、何物かを暗示するが如くして消えた。

それからと云ふもの、村の人達は夢中になつて鋤鋤を手に手に堤に駆け上つた。作兵衛もその中一人でやつとの事で堤に上つた時には、胸が焼けるやうな痛さと、火を吐くやうな呼吸に、死んだやうになつてそこに蹲踞つてしまつた。前から見張つてゐた水防夫達は連日連夜の疲苦と空腹に放心したやうに雨に打れた青草の上に崩れるやうに折り重つて、眼の前を流れる濁流に見入つてゐた。

堤の上から四五尺下の所を黒々とした濁流が矢のやうな早さで押し流されつゝ、うねりを打つては前へ前へと送られ、上の方の二・三の枝を出した岸邊の柳が渦巻く水に引きつけられながら吼えて流れ、無數に立つた岸の棒杭に恐ろしい音を立て、突き當り、其の白い泡が水車の飛沫のやうに迸ると、棒杭全體が身顛する程に濡れる。

村の人達は、去年も、その前の年もあつた事がら、それを見ると來るべき明日の運命に、狂氣のやうになつて悶え嘆くのだつた。老婆らしい一人が細い細い聲で、

「今年もまた水入りか、厭なこつた。」

それを聞いた時、子供達は壓されたやうに泣き出した。それにつれて何處からともなく人々の鳴咽が起つた。

作兵衛老人は土に伏したまゝで、

「雨だ、川だ、うん違ふ、この堤だ、この堤の土だ。これだ、これさいしつかりしてゐればだ。」

雨に流され、人々の足で掻き亂された堤の

土を両手で掻き集めては、それに頬擦しながら大聲を上げて泣いてゐた。

吼え合ひつゝ流れる川水の上を、巢も奪はれ、子も奪はれた行々子が幾羽も幾羽も、血を吐くやうな聲で、己が身の濡れるのも知らず、川原であつたその上を流れゆく木々の破片の間を鳴いては飛ぶ聲が、暮れきつた中にあつて何時迄も何時迄も聞えてゐた。

朝 鴉

その夜。何處かで一番鶏が鳴く頃、堤の上へ立つた豊吉等の若者達も流石に疲れに疲れた果、一寸々々と増す水嵩も忘れて、或る者は叢の中、或る者は土俵の上で、何時しか深い眠りに落ちてゐた。その無氣味な静寂の中にあつて水音だけが不眠の休まざる活動を續けつゝ、平和なる村を、素朴なる村人を贅しつゝ、悪鬼の妖笑をしてゐるのだ。姿なき妖怪が人間の不可抗なる自然力となつて力無き人間を嘲笑してゐるのだ。

急に風が出たらしく、叢がざわめき出し

た。上手の方から提灯の光が二つ重り合つて走つて來るのであつた。豆粒のやうな灯が次第に大きくなつて來た、明滅する二つの灯が吉か凶か頻にちらついてゐるのだつた。寒氣を感じた豊吉がガバツと叢の中から起き上つた時には提灯は彼の眼の前だつた。

「何事です、何か起りやしたか。」

豊吉は眠さも忘れて叫んだ時、喘ぎきつた

提灯の主は二人とも、

「大變なんです。」

云ひも終らず豊吉の所へ駆け込んだ。

「おゝゝ、忍の中條が切れたんで……」

驚く豊吉をはねのけて一人が、他の水防夫

を見ればみな眠てゐるのだつた。

「知らぬは佛たあ、このこつたあ。」

細く云つたその聲に、彼の唇は妙に痙攣

してゐるのだつた。

「村の衆。——」

豊吉が云つた。直に提灯をまだ放さぬ二人

が聲を並べて叫んだ。

「たゝた、大變だぞ、又忍の中條が切れたぞ

う。寢呆けた聲が方々から起きた。

「う……うむ、何か食ひ物を持つて來たのか。」

その聲々は誰もが然う云ふのだつた、人間として本能から迷ひ出づる眞の叫びであつたらう。

「やつぱり食道餓鬼だなあ、無理もねえ、それどこぢやねえど、忍の中條が切れたんだよ。」

提灯を持つた二人は云ひ終へると同時に氣

が弛んだものか、倒れてしまつた。その二人を抱き起す豊吉の耳に、

「なゝな、なんだ そりやまつたくや、さり

やまつたくなこつたかあ。」

寢耳に水の悲報に人々の驚愕と悲哀の聲が

嵐のやりに響いた。

東の空が白ら白らとして來た、村の人達は

總べてを神から與へられた運命として總べて

の不幸を諦め、平靜に心を落着け且つ冷靜を

保つてゐた。豊吉も提灯を持つて報せて呉れ

た隣り村の蘆屋の若者も、他の者を慰めなが

ら自分達も涙ぐむのであつた。

「早稲ぐらゐ穫れましたらなあ
村の衆。」

氣の良い松三が、

「豊吉さん、まつたくなあ、氣強
いお前さんが居るんで村の衆は毎
年どんなに水入りの時にやみんな
が氣強いかわれねえやなあ。」

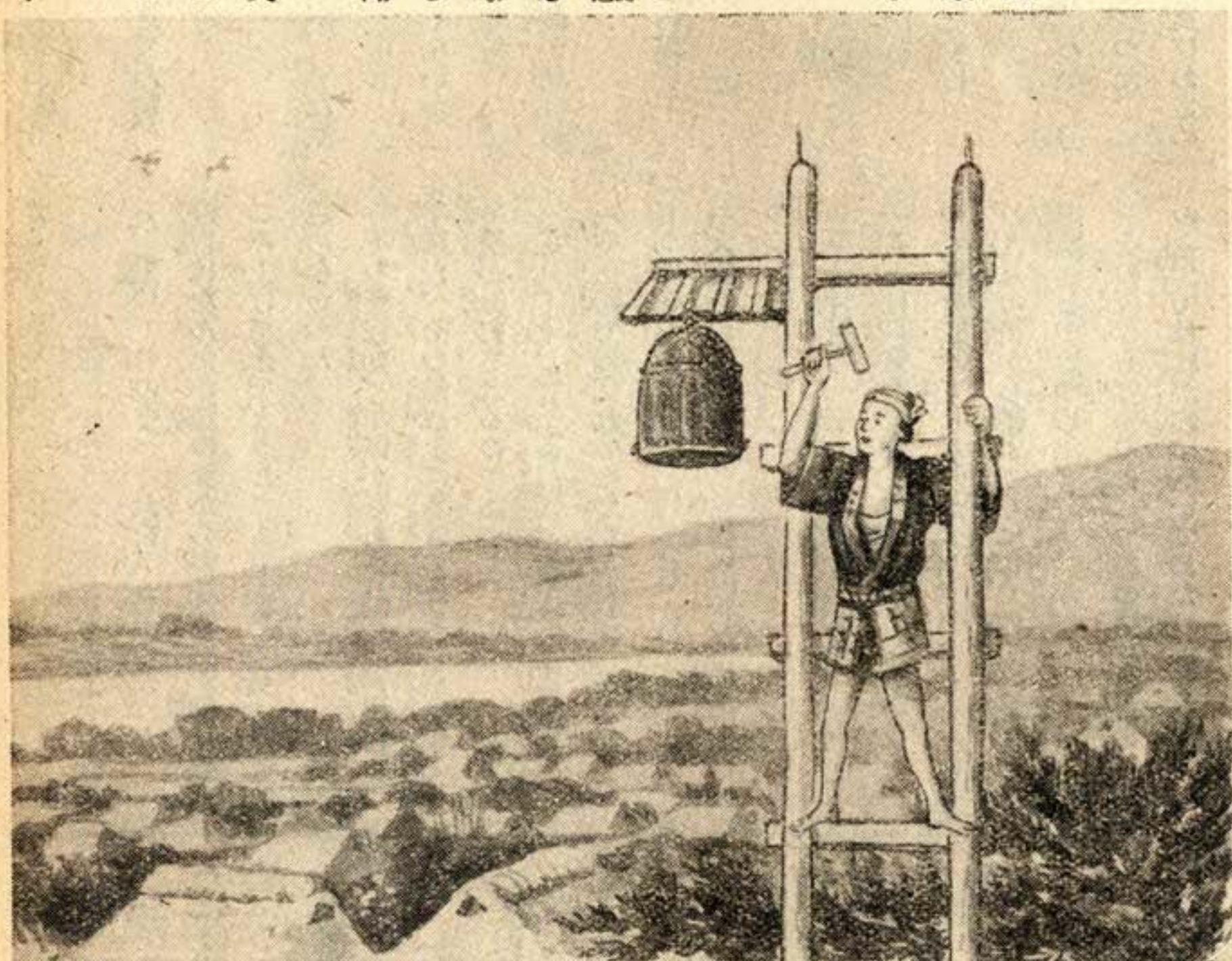
豊吉も

「幾分皆様の御力になりや。」

低い聲で豊吉は云つて、みなを
見た時、彼等はみな彼に充分の感
謝の念を含めた視線を向けてゐ
た。豊吉はやつと他國者でなくな
つた。然る思へる時、村の爲なら
と心の奥ではつきりと叫ぶ聲を聞
いた。みな村人は話し出した。

「到頭駄目さ、もう半月待つて呉
れりやふんとに早稲ぐれえ穫れた
に、まだ盆前ぢや、どうにもなん
ねえ。」

「いよいよ、食へなくなつちまう



た。」

「全くなあ、これから人間の干物
が出来るだんべえ。」

「長雨がやつとのことで上つた
ら、またこの洪水だ。今朝のけろ
つとした天氣はどうだい、天道様
も随分薄情だなあ。」

フト見れば、澄み切つた東の空
に、雨の後の日の出だけに、その
色も火の燃えるやうではなく、灰
のりと穏やかな薔薇色を漂はしつ
つ燦々と心持良い光線を投げて、
細長い雲の後ろから悠然と昇り、
活々と輝いてゐるではないか、そ
れが濁つた廣い急な流れの上に散
り無數の小波となつて怖いもの
のやうに光つてゐるのだつた。
「兄や、御飯持つて來たあ。」
松三の妹のおくめが堤へ駆け
上るのを見て、みなのは初め
て我に返つたのだつた。

「然うか、うんと腹がへつてなあ、昨日の午食ちつと食つただけだもの。」

辨當を兄に渡ししたおくめは川を見てゐた、

「まだ大丈夫だあ。」

それを聞いて松三は、

「おくめ、お前はまあだ知るめいが、また洪水だぞ……」

「嘘だ。まだ堤へ三尺位あるぢやないか。」

村の人達はみなおくめに云ふのであつた。

「それでも駄目なんだよ、忍の中條が切れちやつちや半日とも持たねんだ。」

それを聞いたおくめは泣きながら堤を下つて行つた。

「みな衆、食べて呉んねえ。」

おくめの泣き聲が段々遠ざかつて行つた。

「乃公は大丈夫だ、済まねえからなあ。」

無理に松三は人々の手から手へと少しづつ

の飯を渡しして歩いた。

「乃公一人で食つたつて、咽喉へ通るか。」

彼は渡し終へてから然う云つて笑つた。

「みんなこれでもう穀なんざあ、食ひおさめ

かも知んねえぜ。」

皆の者は誰かの然う云ふ言葉を聞きなが

ら、黙つて口の中へそれを入れるのだつた。

豊吉はなんだか腹の底から熱い塊が胸に迄

こみ上げて來てどうしても咽喉から奥へ嚙み

込めなかつた。

その時突如、半鐘が亂打された。芦屋村の

半鐘だ。その鐘以上に人々の胸には混亂たる

早鐘が亂打されるのであつた。

「あれ——、ありや芦屋の三角辻の半鐘だべ」

「やあ隣では切れちやつたんだな、さあかう

しちやゐられねえ。」

「大變だおらが方も名主様へ話して半鐘をひ

つばたけ……」

「早く片付ろ、家の奴等助けねちや大變だ。」

人々は只何事も忘れ、我先きにと夢中にな

つて堤を駆け下りるのだつた。豊吉もそれら

の人々の後から轉ぶやうにして作兵衛老人の

田圃へとつ走つした。

その騒ぎも知らぬ顔して村の臺地の糺の森

の頂では鴉が頻に啼いてゐた。(續く)

青銅 十二支守本尊の頒布

この度青銅浮彫守本尊の意匠登録を得て信仰の徒にお頒ち申すこと相成りましが、右は各人の十二支性によつて守本尊八體佛を臨作し、自己向上誓願の供養に、且つは來世の淨土往生の本願のために、良質の青銅板浮彫本尊の背面に俗戒名履歷遺言人世觀等の欲するまゝの文字を刻み込み永久保存に耐へるやうに致したものであります。従つてこの守本尊によつて自己の性格を反省し精神向上を期するのみならず、旅行や特に出征時には之を携帯奉安すれば精神上莫大の冥加を受けるものと信じます。(八尊庵主)

定價 貳圓 (送料二十五錢)

生年月日、姓名彫刻料 二十錢

外に文字彫刻御希望の方は御相談に應じます。

(本會でお取次いたします)

俳壇

大田 耳動子



東京 三野輪江雪
露に冷えて棘のするどき薊かな

評「地味な句は一見何處が宜しいのか判りかねるがしみる味はへば句趣津々として盡きない特徴をもつてゐる。『薊』見れば頸筋あかき薊かな 芭蕉」のやうなのがそれであり、此の句の如きも亦その一例である。句意は鬼薊でもあらうか。棘の先が露にしつとり濡れて光つてゐる。それが如何にも鋭い感じを興へると云ふので「露に冷えて」が非常によくきいてゐる。

大阪 前中 杜丘

秋の蚊の忘れし頃をしてやられ

評「作句する場合、自分はどうな見方(觀察)をしたか、自分はどんな表現をしたかと云ふことを與へるも忘れてはならない。若し其れが他の俳人と大差がなければ其の句は大いしたものとはならない。此の句の場合、たしかに異色があると思ふ。さて句意は蚊帳を吊らなくなくて程たつて、蚊の事なんかで念頭に無くなつて頃をチクリとやられたと云ふのである。作者が不意をつかれて「チー残念」と云つてゐる様が眼に見えるやうだ。『してやられ』が其の間の消息を遺憾なく云ひ表はしてゐる。此の表現は俗語である爲めに其れだけ品位を落してゐる。功罪ともに此の表現にかゝつてゐる。

大阪 六尾 竹雄
秋閑けて寛も龍も一つ音

評「寛と龍とは一昨のうちに收められる處にあり、そして作者は寛の近くに立つてゐるものと解したい。寛の水音も、龍の落ち込む音も澄んだ大氣の中に其れを聞いてゐると一つになつて聞えてくる。はては音も何も聞えなくなつてボーンとしてくる。更に、はかない静寂にさへ聞はれはしまいかと思ふ。斯うした心境を「秋閑けて」に依つて遺憾なく表はし得てゐると思ふ。

姫路 内海 一音

母一人子一人夜學はげみけり

大阪 小山 文二

山里や古りたる柿の家多き

郡山 安齋 四郎

陽がさせば火鉢の炭の崩るゝよ

愛媛 千葉 長行

明月を雲の渡るも情あり

信州 久保田 頼

女郎花朝の峠の茶屋空きて

京都 福島 峯松

薄霧の寒さおぼゆる夜明けかな

朝鮮 末光 一味

汗ばめる遺品のなかの手帖かな

青森 佐々木 涼湖

赤とんぼ風をかはせる芝かな

福井 橋本 富翁

秋茄子にはやあかぎれとなる氣配

津久見 石堂 柑山生

新築の障子に秋の來りけり

新郷 木田 眞砂

夕鐘の流れわたりぬ女郎花

新宮 奥村 映水

朝寒の足を早めて詣でけり

京都 日野 碩雄

かなしさは一人聞く夜の秋の蟲

久留米 佐藤 南宏

秋風に吹きよせられし落葉かな

朝鮮 鄭 江 廣吉

天ひろく澄み渡りたる冬の月

奈良 今喜多 和夫

夕闇の一時鳴子からくんと

大阪 六尾 竹雄

青磁こき花瓶こぼるゝ秋の水

東京 間宮 凍石

山越せば風見えてるし青田かな

神奈川 岸 ちく

石多き庭でありけり赤蜻蛉

東京 芝 紫 緑

捨てらるゝ句もまたかなし虫の秋

神奈川 田邊 双櫻子

東京 長迫 貞子

ゆくりなくも白萩のもと桔梗

同 須田 曉鐘

迫りくる山をはじきて百舌の聲

大磯 豊田 てる

ユユース聞く群のしぐまや月明り

東京 稻野 逢露滴

鱗雲明るし月は金色に

青森 梅村 夢雲

新涼の窓邊に月の廻りたる

東京 小野 みつ子

秋あつく霞にうづまり憩ひけり

宮城 豊蔵 久子

病葉の散り易きまで秋の風

東京 杉浦 茶々子

灯を消して花火の二階設けたる

同 問宮 春生子

打水にかまきり首を擡げけり

同 江森 恒幸

秋晴れの田の道行くや蟬取り

宮城 庄司 香月

貨車にゐる馬いなくよ秋晴に

大鰐 相馬 照子

送り火は悲しきものよ母と吾

茅崎 高羽 黄石

新涼の露臺に蘭を吊りにけり

横須賀 若生 藤四郎

夕顔の葉よりも高く咲きにけり

東京 村上 サダ子

草角力にアイスクリーム賣る子哉



小説 敵城の報恩

小島健三
玉井徳太郎畫

一

路の兩側は、晝なほ暗い老杉におほはれ、蟬しぐれが、ふるやうに騒々しい。そのなかを前方を五騎、後方を八騎に守られた領主鮎川小平太は、領民の生活を一心に見廻つてゐるのだ。

だが、物騒な世の中である。いつ何刻、敵の者が飛びだして領主に危害を加へぬとも限らぬ。屈強守護の勇士の神経は、針のやうにするどく、葉末をわたる風の音にも氣が昂ぶる。

杉林をぬけると、一面の茅原だつた。身を没するほどに伸びた茅のなかに、行々子が焼けつくやうに鳴いてゐた。暗い鬱陶しい千古の杉林から出て、一同がほつとしたときである。

先觸の一騎が炎天に松の根のやうな太い手をあげ、突如——
「怪しい者があるッ」



手綱をぎゅつと締めて叫んだ。

次の馬は、怪しい者に愕いたのであらう。竿立ちになつて狭い道

で荒れだした。一行はぎよつとして刀の柄に手をやつた。

前方の三騎は、ひらり馬から飛び降りて、じり／＼照りつける太陽にぎり／＼刀を抜いて茅原に躍り込んだ。

しかし、領主鮎川小平太は、眉一つ動かさなかつた。見る間に四騎が小平太を取圍んで守つたし、残りのものは、前方に進んだ。

引だされたのは、一人の武士だ。武士といつても、髪は蓬々伸びるにまかせ、土氣いろに變つた顔には、生氣の影さへ見られない。着物は埃と汗とに滲み、廣いながら瘦せた肩が枯木のやうに尖つてゐた。

「何者ぢやッ。名をなれッ」

守護の勇士の聲に、武士は、どろんとした眼に涙をすこしたため、乾いた唇をひく／＼と動かして何やら訴へようとしたが、聲さへだす氣力を失つてゐる。

「油斷はなりませぬぞッ」

小平太が、身を乗りだしたのへ、従者は火のやうな警告を發した。よく死人の眞似をし、油斷をさせて咄嗟に危害を加へるやうなことがある。それを従者がいましめたのだ。

だが、小平太は、何を思つたか、ひらりと馬からおりた。つか／＼と引摺だされた泥まみれの武士のそばに足を運んで、ち／＼と見つめてゐた。

濃い眉、長い睫毛、きりツとした口元、武士のたしなみと云はれる刀のはてまで仔細に見つめてから、

「水をとらせいッ」

と、云つた。

出羽の由利十二頭のうち、一番の年少氣鋭の小平太である。鮎川臺にたてこもつて着々その勢力を四隣にひろめ、日の出の勢ひの青年武將だつた。時は戦國時代、帝都を去る大道にして三百餘里、四方嶮岨にして東は重山そびえ、峨々として道とてはなく、南は大師峠の大難所あつて馬駕も通らず、西は滄海まん／＼として要害無双の地に、根井城の小笠原大和守について、鮎川小平太は勢力があつた。

「刀を……刀を奪つてからになさりませ」

飢餓に仆れた武士に、小平太が水をやらうとしたとき、従者はさう叫んだ。

「いや、構うなッ」

水入を口に持つて行くのを見て、そばの勇士は、驚いて、

「もつたいなうござります」

「よい。わしがやらう。だいふ難澁してゐるやうぢや」

咽喉をぐツと伸して、武士はごくりと一口水を飲んだ。

「道明寺備をつくつてやれ」

勇士たちは、急いでその仕度にとりかゝつた。とき／＼事情の判らないことに氣をおく青年大將に従者たちは、戸惑ひすることがよくある。武士は、それから水を二口三口苦しさに飲み、出来た道明寺備を、はじめは咽んでをさまらなかつたが、やう／＼小平太の心づかひで腹にをさまると、みる／＼元氣になつて、

「み、見苦しい態をお眼にかけまして……申わけもござりませぬ」

武士は、小平太を見ると恐縮して平伏した。

「どうしたのだ？」

ほつとして小平太は訊く。

「はい、わたしは小笠原領のものでござりますが、秋田領に修行に行つてをりますうち、母が急病とのことで、急ぎ歸るうち……途中路銀を盗賊に奪られました難澁いたしてをります」

「それなら、袖乞ひでもするがよいに……」

「けふで三日、水ばかり飲んで過してきましたが、人に食を乞ふことはいかにも出来ませんでした」

「懷中の物を賣つても二三日は過ごせたらうに」

「これは、母上への土産にござります。これだけは手ばなしたくはあ

りませぬ」

話し振りといひ物に動じない態度といひ尋常でない品位がある。

小平太は、この武士がたのもしかつた。干魚を出させてすゝめると、武士はどうしても食はうとしない。

「干魚は嫌ひか？」

「いゝえ、嫌ひではござりませぬが、國の母は好物でござりますので、勝手ながらいたゞいてまゐり、母にすゝめたりござります」

小平太は、訊いてゐるうちに、ぐツと胸がつまつて來た。この戰國になんといふ孝行な武士であらう。

「母の土産の品は別に進ぜる。食べるがよいぞツ」

路銀と、道明寺備と干魚を興へて、小平太は領内見廻りの駒をすゝめた。強者は弱者を攻略し、家來が主を討つことを何とも思はぬ今の世に珍らしい武士である。

「よほど腕の立つ武士ぢや」

小平太は、呟くやうに云つた。眼光のするどさ、腕の筋肉、一睨みたとき小平太はさう思つたのである。戰國の世に腕さへ出来れば掠奪すること何とも思はぬ武士の氣風なのに、餓死にひんしてまで盜泉の水を飲まぬあの武士に小平太は、心をひかれたのだ。

小平太は、その日いち日、孝行な武士の面影が眼のまへにちらつてならなかつた。



二

それから、二年の年月はすぎた。

領民は、鮎川小平太を神の如く慕つた。ほかの領からどんく移つて、荒野や嶺岳に、畑や田を開拓し、ひとしく平和の民が領主の徳をたへへた。

根井城に招かれた小平太は、何んの氣もなく二十人の勇士を従へて隣領の小笠原大和守を訪ねた。このまへ、小笠原大和守を招待したその返禮だと思つたからだ。ほかの領主らとは交際どころか、互に敵視してゐる間柄だが、隣領の小笠原とは先代以來の親交があつたので、この度も、氣輕く招待をうけて出かけたのである。

だが、城へはいりや否や、小平太の胸にひし／＼と異様な不安が迫つてくる。だいいち何時もは、こんなに兵士を城内に入れて居ないのに、けふは、武裝をした兵士が、こゝかしこに充満してゐた。

そればかりではない。従者二十騎は、小平太と別々のところに案内されて、城内には入ると一向に逢はせようとしない。豪膽不敵な小平太は、案内された大廣間の廊下を忙しさに往來する武裝の兵を見ながら、すつかり覺悟をきめてしまった。小笠原にかぎつてまさかに卑怯な振舞をしまいと信じたことがこつちにとつて不覺だつた。

「よしッ。それなら、こつちにも覺悟があるぞッ」
屹ッと睨んで周囲の動靜に氣を配つた。

「お待たせいたしました。ご用意が出来ましてござります」
侍女の案内で別間に導かれた小平太、毒酒で殺す氣かなと思つた。
小笠原大和守は上機嫌で彼を迎へた。

「何んのおもてなしも出来ぬが、ゆるりと召上つていたゞきたい」

小平太は、ちツと探るやうなするどい眼を大和守にむけた。先方の重臣が、十人も居並んでゐるのに 小平太の家来は一人も招かれてゐないことも訝しい。

「小笠原どの、けふは何か用意ならぬことでも出来してか？」

小平太の間ひに、ぎよつとして口ごもりながら、狼狽した蒼白い顔をあげ、

「いや何もござらぬ。どうして左様なことをお尋ねぢや？」

「ものものしい城内の警護は、戦仕度のやうに見うけ申したが」

「いや、左様なことはない……」

「小笠原どの、貴殿の父とわしの父とは兄弟のやうに親かつた。他の領主とは戦つても、貴殿とは終生兄弟のやうに助け合つて來た。これから、わしはそのつもりである。貴殿はどうあるか？」

「それは申すまでもない」

大和守の持つた



盃の手

は、ぶる

くと顫

へてゐ

る。小平太は、ちツと大和守の顔いろを覗つてゐた。

「鮎川どの、このとほり毒味をいたした。安堵して召上られい」
重臣の眼と大和守の眼は、怪しく光る。

「ふツふツ……大和守どの、そなた案外の男ぢやつたのう？」

「何にツ？」

大和守も重臣も、一樣にぐいと刀の柄に手をかけて睨めつけた。

「いかに戦國とは云へ、父祖以來信じ合つてゐたものを、隣討にするとは地下の父上もさぞかしお嘆きでござらう。毒味と申されるが、そなたに注いだ酒と、わしの酒とは別ものぢや。まこと毒味をなさるなら、この盃をうけて見られいッ」

「汝ッ——」

かうまで、見破られたからは、大和守一言半句の返答もない。五體がふるくと顫へ、血走しツた眼を吊りあげて、

「鮎川を討てッ」

噛みつくやうに叫んだ。と、同時に、毒盃を持つた小平太の手が早かつた。パツと投げつけた毒酒を、大和守頭からかぶつて、

「に、逃がすなッ、鮎川を斬れッ」

貪慾の鬼に化した大和守、腸を絞るやうな聲で叫んだとき、さつと、背後の襖が開くと、屈強の八人の武士、拔刀のまゝで躍りこんで來た。八人の刺客は、一粒選りの腕達者ばかりである。

「ねかるなッ。そやつを斬るのだッ」

「庭へ出

すなッ」

重臣たちは、狂

氣のやうに叫んだ。

だが、小平太の足は迅

かつた。欄干をひよいと

飛び降りると、植込みへ、

それから城壁へ、猿のやうに跳ね

あがつた。

「あつ——」

人々は、聲を呑み、いろを失つた。しかし、

どう逃げたところで、濠に取圍まれてゐる根

井城である。羽でもなければ、逃がれる道が

ない筈である。

「あつ、屋根へ、——屋根へ登つたッ」



逃がれど

見れば、なるほど、城壁をすべるやうにして、大木に姿を没した小平太、こんどは、城の屋根へと雄姿を現はした。なほ、人々を驚かしたことに、この人間業とは思はれない小平太の早業に、つゞいて刀を咬へ、髪をふり亂し、あと遅れずと追つて行く一人の刺客に眼を睜つた。

「おう、吉川源吾だッ」

と、異口同音に叫んだ。

「吉川の刀にかゝつては、いかな鮎川

でも一たまりもあるまい」

「死んでも今日の恩賞にあづかりたい

と申してゐたが……」

小平太は、屋根のてつぺんで、吉川

源吾の來るのを待つてゐるより仕方

なかつた。人々は、固唾を呑んで、二

人の決戦を見守るばかりだつた。

三

根井城下に道場を開いて、劍道を教

へてゐた吉川源吾母子は、苛斂誅求の小笠原領から一日も早く帝都に逃がれ、思ふ存分な修行をつゞけたかつた。そのために、どんなことをしても大金を手に入れたと思つてゐた。

時もとき、城内から逆臣を斬れば、莫大もない恩賞があると金子につられて源吾は刺客になつたのである。だから、この機会を逃がしては、永久に自分に幸運がめぐつて来ないのである。

だから、尻ごみする危険な城塀を、源吾は猿のやうに登つたのも、帝都で修行をしたい一心と、母に孝養をつくしたい火のやうな眞心にほかならない。

「あつ、鮎川奴、刀を抜いたぞッ」

庭から眺めてゐる重臣が聲をかけた。

大和守は、毒酒をかけられた顔を洗つて、庭に飛び降りた。

「鮎川の従者たちは大丈夫かッ？」

「はい、みな座敷牢に入れてござります」

「はつ、はつ……もうこれで、鮎川領もわしのものぢや」

大和守の聲は、うはづつて響いた。

鮎川小平太は、こんなところで騙討にされるのが口惜しかつた。何とかこゝを逃がれ、正々堂々根井城を踏潰して復讐してやりたい。ここさへ一時逃がれることが出来れば、根井城をおとし入れることなど小平太には容易だつた。

だが、敵軍注視のなかに死んでゆくのかと思ふと小平太は情なかつ

た。見るからに頑強な刺客が歩一步野獸のやうな眼を輝かして近づいてくるではないか。

小平太は、びたりと刀をつけた。刺客の源吾は、嵐のやうに呼吸をはづませて、口で咬へてゐた刀を右手に持つた。互に無言で、ぢりぢりツと上下からにぢり寄つた。

——と、源吾、

「あつ——」

思はず、口走つた。しかし、小平太は、相手を仆すことに夢中だつた。

「お、おまち下されッ。逆臣と承つたは、あなたさまでござりまするかッ？」

「……」

「お名前を、お聞かせ下さりませッ」

「いまになつて名を申したとて何になる。わしは、鮎川の領主、鮎川小平太ぢや」

「お、わたしでござります。いつぞや、鮎川領で餓死をしようとしたところを、あなたさまに救はれました吉川源吾と申すものにござります」

「お、そなたがッ——」

「そのまゝ、屋根陰に……屋根かげへ退いて下さりませッ」

呼吸をせい／＼切らしながら、二人の刀は結び合つたまゝ、誰の眼

にも觸れない屋根かげに吸はれるやうに、消えてしまつた。

間もなく、小平太が刀を振つて、屋根のてつべんに仁王立ちになり、

「吉川源吾は討つた。われと思はんものは、出合へッ。卑怯なる大和守に鮎川小平太の最後のほどを見せようぞッ」

破れるやうな大音聲に叫んだ。

それつとばかりに、追手が、縄梯子をのぼつて屋根へと這ひあがつた。われこそ、敵將の首を申受けて恩賞にあづからうと、ひしひしとつめかけた。

屋根に突ッ立つたのは、小平太ではなく、實は小平太の衣類を着た吉川源吾であつた。飢餓から救はれた恩を、いまこそ果たせろと思つたとき、源吾の眼には、いつばいの涙が溢れてゐた。

恩人が、自分の衣類をまとい、屋根うらを鼠のやうに傳つて、濠の小舟に勇敢に飛びおりたのを見さだめて、源吾は、瓦を小石のやうに刺客どもに投げ飛ばした。

それから、五日とたないうちに、鮎川軍に根井城は取圍まれ、間もなく落城した。

吉川源吾母子は、小平太の領内に安住し、源吾は、小平太に變らぬ忠勤を勵んだ。

(をほり)

實話小篇 「もう、來ちまつた」

出征兵士の挿話を一つ。東京市内の某寺に宿舎を定められた數名の出征兵士さん達。それと知らずに上官に連れられて、いそ／＼と宿舎を指してやつて來た。「こゝだ」と云はれてひよいと見るとお寺の門。「やア、もう來ちまつたッ」と歎聲を發したと云ふ。つまり、どうせ戦死すればお寺の御厄介になる身體。それが戰場へも行かぬ中にお寺の厄介になるのだから、もう來ちまつたと云つた譯。ところが、そのお寺の和尚さんが、話の解つた人で、兵隊さんと全く一緒になつて生活し、飯も一緒に食べれば、酒も一緒に飲む。そしてその合間には佛教の話をする。と云つた具合で一週間程の中に非常にお互ひに親しくなつて見ると、何もお寺だつてお葬式ばかりやつてゐるところぢやない、佛教による生死の超脱は一死報國の日本魂の根本だ、と云ふことが解つて來て、始め縁起が悪いなどと云つてゐた兵隊さん達もすつかり悟を開いて出發する時には全部が和尚さんに自分の戒名を書いて貰ひ、それを肌身につけて勇氣凜然として征夷の旅に赴いたと。

鑽仰運動ニユース

新年號は全頁特輯の

豪華版に決定す

次號に全貌を豫告せん

銃後の熱誠は驚くべきものが
ある北支に中支に南支に超人的
活躍をなしつゝある皇軍を思へ
ば當然の事と云へるかも知れない
が、空前の大感激である。この感
激あればこそ將士も心おきなく
戦へるのだ。然しこの熱誠が一
時的興奮に終るやうな事があつて
はならない。
「戦ひ」が長期にわたればわた
る程銃後の守りは固くしなければ
ならない。その爲に斷じて動じな
い宗教的信念の涵養に努むべきで
あらう。本誌もこの宗教的信念確
立の爲に層一層内容を充實して、
國民精神總動員の一助たらしめん
と欲して、鋭意編輯に力を盡して
ゐるが、先づその手始めとして正

月號は全頁にわたる大特輯號を
刊行する事に決定した。プランも
執筆者も殆ど確定したから來月號
にはその全貌を豫告する筈である



國防献金托鉢の

西福寺支部

青森縣北郡横濱村の西福寺（主
任和泉順道）では非常時の折柄國
防の重大さを認めて、幾何でもそ
の資金に供したいと、主任始め支
部員が一致となつて、過般國防献
金托鉢を行つた。朗々たる御詠歌
の裡に肅々と村々を廻つたが、そ
の眞摯さには全村心から打たれ
て余期以上の効果を收めて大成
功であつた（寫眞は當日の一行）

が、好評續々であつた「念佛讀本」
以上の豪華版を出して、讀者をア
ツト言はせようと編輯部一同非常
なハリキリぶりである、乞ふ、御
期待を。尙、十二月號も既に原稿
が揃つて編輯にとりかゝつてゐ
る。編輯部の緊張と共に、讀者諸
賢もこの非常時に充分の活躍を
せられん事を切に祈る次第であ
る。かくして「淨土」は出版界の
殺人的不況も物かは、益々激刺と
前進して行く。法然上人鑽仰の旗
の下に愈々充實して行く。

會員の聲

▼「淨土」の著しい發展振りに實に驚か
されてゐます。内容の充實したこと、而も立
派な諸先生が御執筆下さる事は無上の喜びと
する所であります。「淨土」は決して他誌と同
視しないで二回三回と何回も何回も繰返し讀
んで、眞の宗教と云ふもの及び諸先生の眞創
なる御氣持を充分にくみ取つて向上發展の資
とななければならぬと努力してゐます。こ
の雑誌ばかりは實に暗記する程讀み返してほ
しいものです。國家は正に超非常時となりま
した。併し我等銃後の國民は決して一時の興
奮と一時の勇氣とおだてられてゐてはなり
ません。長期戦の準備を怠つてはなりません。
それには實業・徳義・國防献金と種々の方法
を講じて、愛國心を發揚せねばならぬのは勿
論ですが、それ等物質的のものよりも、もつ
と／＼大切なものは實に國民思想の堅實であ
る事です。思想の堅實は實に銃後の國民の義
務であると思ひます。この秋に當り「淨土」
による思想・精神の指導的確なる事を信じ
てこの思想を全國民に植へ付ける事は我等
「淨土」の愛讀者の義務であると痛感するの
であります。（兵庫縣・中田恒雄）
▼十月號拜受、延び行く「淨土」に心から
なる感謝を捧げます。そして吾等の「淨土」
出現を期して此處に編輯部に御迷惑な難題を
一問提出します。それはこの「淨土」の貴重
な紙面をさかれて二頁なり三頁に載せる所の
原稿を一般から購置募集されては如何がでせ
うか。その内容は勿論通俗淺顯なるものを選
べて信仰體験談、感激美談、隨筆、小説等を
せめて三頁位の分を募集せられてはどうでせ
うか。毎月とは云ひません。そしてその賞與

傷病兵を慰問した

貞恭支部の美舉

「浄土」大歓迎さる

本部直屬の婦人部たる貞恭支部では、傷病兵慰問を思ひ立ち、出来るだけ多くの人々の温かい心によつて慰問せんと一人十銭の傷病慰問金を廣く募集したが、各自の目覺しい努力によつて餘期以上の多額に達したので、感謝の胸をおさへつゝ十月八日折柄の大雨を物ともせず、牛込の陸軍第一衛戍病院に出かけた。約五百の傷病兵が激戦を偲ばせる重傷の體を靜かに横たへてゐたが、その一人一人に菓子と「浄土」と花を手渡しながら、真心こめた慰問の言葉を贈つた。餘りに丁寧な慰問と若い女性許りであつたので、傷病兵の喜びは非常なものであつたが、中には重傷を忘れて夢中に話をして軍醫にとがめられる兵もあつた。殊に「浄土」は非常に歓迎された。雑誌が餘り入

つてゐないのと、大部分の傷病兵が戦火の下で生死の境をくぐつて來て宗教的になつてゐた爲に感激して受取つてくれた。特に長繩忠少尉は法然上人を研究してゐられた爲、話は非常にはずみ、かへつて色々教へられると云ふ始末だつた。とにかく非常な成果を擧げる事が出來て大成功であつた。尙この好成绩に鑑みて更に第二、第三回の傷病兵慰問を

行ふ事に決定し、目下着々準備中である。どうか各支部でも衛戍病院のある處は、傷き倒れた勇士を心から慰問せられるように願つておく。

選擇寺支部
例會を開く

千葉縣木更津町の選擇寺（主任山本録瑞）では、十月十三日午後一時より例會を開き、本部より大正大學講師池田英淳氏を講師として派遣したが、非常な盛會で、會員は終始眞面目に耳を傾けた。非常時らしく緊張した會であつた。

正大生特別懸賞小説は

一等なく一二等決る

八月を以て締切つた大正大學々生よりの懸賞小説募集は應募點數二十餘に達し周到な審査を行つたが、遺憾なく第一席に該當する傑作が見當らず、本號に發表した豫科二年生梅澤義明君の「洪

水異聞」を第二席として採用した。第三席は「チンチャー」を書いた須磨一郎君。前回にも一等なく今回も一等なし、正大生たるもの奮起して頂きたい。（係）

は、その月の寄稿者に対する謝禮の金を一等にのみか、一二等か適當に出さるれば如何でせうか。決して多くを欲しないです。この事は決して「浄土」の精神にもとるものでなく、「浄土」を一般により近づかせるものであり、意外の場り出するものや、隠れたる文士過材を見出す事が出来るからしれません。この事はありふれた事ですが、効果の大であらうと思ひます。たゞ編輯者各位の勞苦と繁忙とは増すが幸禱して頂かねばなりません。そして應募資格も浄土精神により一般に彼れなく、他の營利雜誌の如く、本紙應募資格の事などと云ふ事をせない事です。私の愚案も本誌の發展を思ふ故です。失禮の言葉をお許し下さい。（京都・豐島生）

▼祝本會の發展。九月號の編輯者の苦心お察し申します。三寶の飯を食ひながら、坊主らしくない偉人の論説より特權官話の方が燃たる光彩を放ちます。九月號のは特に結構に拜見しました。ペ博士の記事は丸でキリスト教の宣傳誌のやうに思ひます。よい種ではありますが一頁位でかたづけざる原稿ですね。次に次號への編輯に就てこんな考を待ちます。宗務所、總本山、四ヶ本山の支那事業に就ての對策を、廣告欄を廢止して、そこに記載出来るなら讀者の權信使の満足は大きいものでせう。中外、衆報、各機關門關係の新聞は余程の人でなければ見ません。本願寺の活動は朝日新聞にあります。天台宗、禪宗も同様、たゞ獨り本宗は管長の講演會は別として、朝日の京都版に三行程、住職出征者には袈裟を與へる事があつたのみ。宣傳が盛であつても權信徒に本當の活動を知らす意味から御考へではありませうが、激務する所を申し上げて參考に致します。「戦争と本宗の教義」この論題は現下最も必要、是非掲載を願ひます。（京都・一宗門人）

▽答——結構な御意見有難く頂戴致しました。事業に對する宗門の動きはニュース欄で出来るだけ取扱つてゐますが、尙貴意に沿ふよう努力します。「戦争と宗義」は本誌に是非掲載する筈でしたが、お預めした執筆者の止むを得ない事故の爲遂に頂けませんでした。來月號には必ず掲載します。

血を湧かした 昔の戦時ニュース

加藤新八

感激の餘り涙を流すなどと云ふことは

男子一生の間に滅多にあるものではないが、今次の事變以來の皇軍將士の奮戦振りを新聞、ラヂオニュース、映畫等に見聞する度に、この幾度も無い筈の涙が知らず知らずのうちに頬を傳つてゐるのを感じるのが屢々だ。然し、この鬼神をして泣かしむる底の軍人精神、國民精神の發露は勿論、一朝一夕の産物ではない。長年月、數次に渉る國家的訓練の賜物である。

で、私は目下の事變の皇軍の華々しい奮戦振と思ひ合せて、日清、日露兩戰役に於ける勇士等の力闘を、當時の資料に基いて紙數の許すかぎり回顧して見たいと思ふ。今昔思ひ合せてまた感慨の新たなるもの

があらう。

勇敢なる水兵

まづ「煙も見えず雲も無く」で誰れでも知つてゐる軍艦松島の一水兵のことを、當時の時事新報によつて見ることにする。

海洋島附近（黃海）の海戦に於て、各艦とも將校より下士卒に至るまで非常の勇を振ひしは今更云ふまでも無き事なるが、今軍艦松島の副長向山小佐が或る人に語りたる所なりと云ふを聞くに、敵彈の我が艦上に破裂し肉飛び血迸りて幾多の死傷者を出すや流石の兵士等もこの慘狀を見て幾度か其勇氣を沮喪する事なかるべきやと氣遣ひたるに彼等は益々勇奮し幾多の死體を飛び越えて立働きたる

は實に驚歎の外なく、日頃其上に立てる我ながら斯く迄も勇敢ならんとは思はざりし。現に一等兵曹某、四等水兵某の如きは能く下層の火藥庫を護り、或ひは敵彈破裂の餘火今にも其下層に延焼せんとするの危険ありしに拘らず敢て動かざりしのみならず、自ら其着衣を脱して煙火の漏れ来るを密閉し我艦の危険を未然に豫防したるは最も感賞すべく、又此戰闘中、或る水兵の如きは身に十餘箇所の創を被り面部體に火傷して氣息奄々たりしも、余（向山少佐）の通行を見て、副長殿と呼び苦しき聲にて「定遠はマダ沈みませんか」と云ふ。故に余は「心配するな定遠は最早砲發の出来ない迄にヤツ付けたれば、コレからは鎮遠をヤルのだ」と答へたるに彼は微笑して「ドウか仇を打つて下さい」との一言を最期として其儘絶息せしがに死に瀕するも尙ほ、且つ勝敗の結果如何を口にしかと余の胸中は張り裂くばかりに苦かりし。又以て水兵の如何に勇敢なりしかを察すべし。

（明治二十七年十月六日 時事新報所載）

黄海の海戦は明治二十七年九月十七日であつたが、「煙も見えず」の軍歌はこの新聞記事に依つたものであらうが、この一小記事が如何に當時の國民の血を湧かしたか思ひ知られるのである。

横川沖兩志士の最後

この後十年を経た明治三十七年日露戦役の最中、七月三日の時事新報には、横川沖兩志士の最後の有様として「……五月二十五日ジブルラスに載せたる四月十九日哈爾濱通信は當時の光景を窺知するに足るを以て左に全文を掲ぐ」との前書の下に左の記事が掲載されてゐる。

捕縛又捕縛日本人の取押へらるゝもの相繼ぎ今日は又チチハルの邊にて今や將に鐵道を破壊せんとしたる刹那脆くもコサツクの爲めに取押へられたる日本の大佐と大尉とがハルビン軍法會議の法廷に引出さるゝ日なり。未だ出來上らざる一棟、屋根だに無き所に白木の机を前にし、椅子と云ふ名ばかりの臺に腰掛けたる三人の露士官、之れ當日の裁判官にして、

尙ほ左に控へたる二名は一人は検査官にして他の一人は辯護人なり。見渡す限り法廷に傍聴するものは唯二人獨逸新聞記者一人と吾とのみなりし。

嗚呼恐しの活劇、如何なれば社會は斯くも殘忍なるか、裁判の結果は必ず死刑を宣せられ如何にしても處刑せざるを得ざる此二人を、如何なれば更に之を苦しむることをなすぞ。力弱くして自身進んで戦争の根を斷つ能はざる小國を喜ばしむる爲なりとか、扱ても彼等の所謂萬國公法は凡て罪を定むるには必ず法廷を要すべしとの結果、既に定まる自己の運命に付き聊か疑ひなき是等の捕虜が如何ばかり苦痛を感じるかを顧みざるなり。

「被告を呼出すべし」と穩かにして少しく囁れたる聲は裁判長の大佐の命令なりし。見る間に現れたる二人の日本士官未だ支那人に扮装せる儘、本名を更に名のらずして其階級を告ぐ。次で愈々事實の審問となり彼等は隠すことなく凡ての事實を告白せり。二人の小柄なる黄白人は彼等の勇氣を誇ることも無く語り了りぬ。被告大佐は正しく前面を見て一々視

線を裁判長に注ぎたれども、而も尊大の風なく大尉はうつむきて聊か憶せる如く終始足下を眺め居たり。二人共に如何にも一座の同情を惹きて一瞬間の後、軍法會議に列れる士官等はクロバトキンに向つて特赦を願出づるに至れり。

檢察官は最早語を斷ちて言はず、辯護の任に當れる士官は法廷の仁慈に訴へて彼等二人を戦争の捕虜として取扱はんことを乞へり。裁判長は語を繼ぎ、申開きの爲め更に云ふ所なきやを問ふに「別になし」の一語を得、法廷は會議のために休延せり。五分間の後、再び開廷豫期の如く共に死刑に處する旨を宣言せり。二人の日本人は少しも戰慄する事なく此の宣告を諒し、而も聊か微笑の浮べるを見たり、「軍服に更めんと欲するか」とは判長等の問にして「其要なし」とは二人の答なりき。我は背に冷水を浴びたらん如く戰慄しぬ。此壯嚴なる數分間に於ける詳細なる問答は聞ける吾をして水の如く寒からしめ、宣言文及び被告のために特赦を乞ふの電文は遼陽なるクロバトキン大將へ宛てゝ發せられ、又一瞬間を隔て

て返電は來れり曰く「宣告文の如く處刑すべし」と。

廿四人の歩兵の間に圍まれつゝ最も大膽に歩を運び出し、又郊外に出で行く一露里、二本の立木の傍に至りて露國士官は止まれと命じぬ。又日本士官は彼等自ら進んで死地に就けり。目隠しの布を見るや剛膽なる彼等は手まねにて之を拒み又彼等は其小さき軀幹を伸ばして正しく直立し頭を上げ法廷に於けると等しく微かの笑を湛へつゝ。……此時打出す執行小隊の十二の銃彈を各其胸の眞正中に受け了りぬ。嗚呼憐れなる人々よ、遠き彼方の東京には二人の士官の跡に遺せる妻と父なき子とのあるものを。

これは外人記者の筆になるものを譯したのであらうが、如何に兩志士が日本人としての誇りを以つて殉じたか。敵をして如何に歎ぜしめたか。思はず眉上り、肩怒るを禁じ得ない。

白礮隊の突撃 矢張り當時の新聞紙から従軍記者の通信文を一つ抜いて見る。

第四回の總攻撃に當り、旅順街道より前進して最も壯烈なる突撃を試みたる中村少將の獨立隊は、所謂白礮隊なるものにして、……各兵皆な十字の白礮をなし、兵氣大に振ひ一舉に敵壘を抜かんとするの慨あり。右縱隊の選抜隊の一部は之が先頭をなして松樹山北麓の鐵橋脚地隙に達し月の出ざるに、補備砲臺を奪取せんとし、尙月の出ざるに、補備砲臺を奪取せんとし、八時半縱隊突撃を試みたり。

(中略)敵は我兵の砲臺下に達せざるに先

だち、これを發見したるものゝ如きも、

正面の敵は毫も射撃せず却つて松樹山砲臺より猛射して我兵の前進を防ぎ椅子山の探照燈は一直線に我陣地を照して嚴重に哨視せり。我兵は猶ほ前進して散兵壕の前方約二十米突の距離に達するに及び二個の地雷爆發し、且つ敵は猛烈に爆藥を投擲し初め新砲臺よりは依然砲撃を行ふために、我兵の死傷者多し、然るに又暫くして敵は各側面より小銃火を亂發し、後方諸砲臺よりは曳火彈を送り來り我兵の死傷益々大なり、爆藥戰に次ぐに石合戰を以てし、午後九時頃に至つては

最早一刻も支ふる可からざるに至れり。次で中央縱隊選抜隊の一部又前進せしが、尙同一の慘憺たる運命を逃るゝことを得ざりき。最後に豫備隊選抜隊は正面を避けて北側に迂回して前進したるも又先進部隊と運命を同うするに至りたり。而して最後の選抜隊の前進し初めたる頃には山田小佐の負傷を初めとし將校以下の死傷少からず、漸次下級の將校をして指揮せしめ隊位を支へ、云々。(明治三十七年十二月十八日時事新報所載)

これが今なほ皇軍の誇りとする白礮隊の元祖であつて、この不拔の攻撃精神は今日に至つて一層燦然と輝いてゐる。

卑怯な敵兵

今時の事變に支那軍が日

本兵の聲色を使つてだまし撃ちにせやうとしたとの報道を時々見るが、日露戰爭の際にも露兵は日本人の聲をまねて壕の中から「前へー」と號令をかけて、日本兵が前へ出るところを打つたと云ふ、記事が新聞紙に出てゐる。今も昔も敵の卑怯な振舞はかはらぬものと見える。

法語 解説
 容易に實證し得るもの

中村 辨 康

或女性達への法話

元久二年正月廿一日、尋常なる尼女房達、あまた上人の御房へ参りて、戒をも受けたてまつり、念佛往生の様を承はらんと申しければ、上人、先づ戒を授けられ、其後、淨土の法門をのべ給ふに、まづ聖道淨土の二門を分け、聖道難行の様を仰せらるゝに、殊に天台宗に對して釋し給ひ、四種三昧の難行なる事を述べ給ひて

南岳大師入滅のきさみ、諸の弟子達に告げての給はく、汝等方等般若四種三昧に於て、身命をかへり見ず修行すべくは、我れ十年世にあり

て汝等を供給すべしとの給ふに、苦行かなひ難きに依りて、弟子達返答に及ばざりしかば大師入滅し給ひき。師已に入滅せんとし給へるが、暫らくも存命せんとの給はんをば、如何なる妄語をも構へて師の命を惜しまんためには修行しんとこそ、申しつべけれども、始終かなふべからざる間、返答せずしてやみにしかば、師即ち入滅し給へり。如何に況んや當時の我等をや。傳教大師弟子達に四種三昧を一つ宛あてて修行せさせらるゝ事侍りき。慈覺大師は常座三昧にあたりて修行し給けるに、常座難行なりとて改めて常行三昧となると申せり。かくの如きの修

解放せられた女性

行は、上古より修し難き事顯然なり。如何に況んや當世の凡夫をや。とて、聖道門の難行なること、淨土門の修しやすき様、こまごまと仰せられて所詮末代の佛法修行其證をうることを唯だ念佛の一行なり。是れ則ち彌陀の本願に順するがゆゑなりとの給ひければ、信心實をいたし低頭合掌して歸りにけり。

—— 勅修御傳卷二十四 ——

元久元年は法然上人七十二歳の時で、上人の「新念佛主義」が一般の人々に受け入れられて非常な勢ひとなり、將に其絶頂にも達し勢力が強大にならうとした頃でしたから、其年の十月に遂に比叡山の衆徒が蜂起して大講堂に集り「念佛停止」を決議した程、澎湃としてあなどるべからざる状態に、舊佛教徒の驚きと嫉みとを買つた譯でした。が、今まで信仰と云ふことを知らなかつた一般民衆、分けても宗教的に除外せられて居た婦人達は

「宗教には智者愚者の差別もなく男女の區別もない。ただ正しい信仰に依るばかりだ」

と云ふ上人の教を聞き傳へて、誰も彼も云ひ合し誘ひ合して、上人の庵室を訪れてはその御話しを承るのでした。

其頃は日本國中の靈場靈地は悉くと云つてよい位、結果せられ「女人禁制」となつて居たのですから、この解放せられた喜びに京洛の巷に住む人達は云はずもがな、志の深いものはその足弱をも顧ず、旅かけて吉水の庵室へと押し寄せたのでした。

其翌年の正月廿一日でした。

大勢の尼や貴顯の女房達が上人を訪れて戒を授かり法話を承らうとして集つて居ました。

無論此日ばかりでなく、毎日大勢集つたのですが、其日の御話しは至極平易で格別に感銘が深かつたと見えて、特に上人の傳記に書き留められたのであります。

「深廣の法然房」とまで諡はれた上人の事ですから、色々の學者なども訪ねて來られて、素人には判りかねるやうなお話しも時たまならなければならぬ事もあるにはあつたです。彼の鎮西上人が訪ねられた時は、午後の二時から夜中の十二時まで十時間も三重の念佛に就て物語られたと云ふ事です。

佛教の全部として考へられて居た聖道教

實踐的に見直された佛教

ら、専門的に話をなされた場合もあり、さうした時は無論一般の人々は傍聴して居ても面白くはなかつたでせうし、何の感銘も起らなかったことと存じます。何と云つてもやさしい話の方が一般には感じが深い譯です。

何しろ其頃の一般民衆に知られて居た佛教は、難解な聖道門だけだつたのでした。イヤ聖道門と云ふ名さへなく、聖道門が即ち佛教だつたのでした。

つまり「成佛の教」として「聖への道」が佛教の全部であり且つそれが本格的な佛教と信ぜられて居たのでした。無論「淨土」と云ふことも古來から色々な人に依て云はれても居り、實行されても居りましたけれども、それは寧ろ本筋のもではなく「成佛」即ち聖への道を助ける傍系的なものとしか考へられて居なかつたのです。

しかもそれは専門家のみのもので、一般民衆としては或る特種のインテリに限られ、普通には唯だ神社佛閣へお詣りして祈誓を籠める位のことか關の山でしたから、佛教の本筋の修行は出家になつて經を讀んだり、坐禪して心を凝したり、理觀と云つてむつかしい哲理の窮極たる「空」とか「中」とか云ふ理論を冥想したりして、「自分」への執着を取り去り煩悩など云ふ心のわだかまりのないカラツとした明朗な心境に

なることを主として居たのでした。

云ひ換へますれば「佛」と云ふものを主觀的に考へて行くのが佛道修行だと思つて居たのでした。だから一方に於てはさうする爲には生活を正しく整理すべく「戒律」を嚴守しなければならぬことも考へられて居たのでした。

けれども平安朝の浮華放縱の生活に馴らされて居るものにとつては、嚴格な生活は事實上出来ない相談だつたので、一群の清教徒を除く外は、理論研究か精神統一かの二途より外に實際上方法はなかつたのです。

然かも多くはさうした永遠の魂の問題よりも、今ま直ぐ目に見える名譽榮達の方が必要だつたので、佛教研究佛道修行は單に現在の立身出世の道具に利用せられて、本當の道心者と云へる者は數へる程しかありませんでした。

それと云ふのも「聖道門」の教は理論だけが勝つて居て、事實上には手が届きさうでなかつたからです。

謂はゞ繪にかいた餅に過ぎなかつたからです。

此時法然上人の古今絶無と云つてよい位の卓見に依つて、今まで傍系であつた「淨土の教」こそが、本當の佛教の實踐であることが明らかにされたのです。それは實に驚く可き佛教の再検討であり組織替へだつたので、茲に従來の佛教常識

天台の實
修法とし
ての四種
三昧

は根柢からくつがへされてしまつた譯でした。

即ち天台や華嚴や眞言などの諸宗では理論上「即身成佛」

を説きますから、誠に有難い結構な教ではありますけれども、事實生活が之を示さなければ、新聞紙へ書いた百圓札見たやうなもので、一向通用しませんし、また自分の主觀だけで「百圓札」だと思ひ込んで居たとしても、ちり紙一つ買へないならば何にもなりませんやうに、自身の心で「我れ即身に成佛せり」と思ひ込んで居たとしてもや、つばり凡人生活のまゝに「お金も欲しい好い着物も着たいうまい物を喰ひたい」では、随分お粗末な佛様もあつたもので、むしろ誇大妄想狂として世間からは「ほつとけ」と敬遠される位が落ちでせうから、結局「即身成佛」は一般人には通用しない譯だつたのです。

そこへ行くと「淨土門」の方は、平凡人として何時も「如來」を景仰して行く「信仰」其ものが目的でもあり修道でもあつて「自分の力で何うしようしよう」と藻掻くのではなく、如來様の本願に依て「念佛せよ救はん」との天地の綜合の大用力に従つて行くだけでよいのですから、恰度親船に乗つたやうなもので、親鸞上人ぢやないが「地獄に墮ちやうと極樂に生れやうとむかう様次第で」如來様にまかせ切つた

以上、下らない詮索はいらず、根本的な魂についてはちつとも心配する必要はないのです。

法然上人はこの事を「兎ても角ても此身には思ひ煩ふことぞなき」と云つて居られますが、如來様にまかせて居る限りすつかり魂の問題は落着いて居る譯ですから、今更何を苦しんでかあわてゝ理窟を考へたり尋ねたりする必要がある筈がありません。

それですから此法語は唯だ例を天台宗の四種三昧に取つて居りますけれども、さうした類の修鍊よりも、念佛の信仰に依れば現證をハッキリと握ることが出来ることを端的に説明されたのであります。

必ずしも四種三昧のみを取り上げなくても、外にもまだ色色修行法はある譯ですが、當時は天台の四種三昧が一番代表的なものだつたからであります。

一體「四種三昧」と云ふのは元と摩訶止觀と云ふ書物に出て居るもので、次の四つであります。

- 一、常行三昧——佛立三昧（般舟三昧經）
- 二、常坐三昧——般若三昧（文殊般若經）
- 三、半行半坐三昧——方等法華（方等法華經）
- 四、非行非坐三昧——隨自意

第一の「常行三昧」は九十日を一期間としてグルグルと堂内を行道して歩き、口には南無阿彌陀佛を唱へ、心には阿彌陀佛を念じて、念佛専門に心をねる修行なのです。止観には「要を擧げて之を云へば、歩歩聲々念々唯だ阿彌陀佛にあり」と云つて居ますが、九十日の間少しも休まずにそれをやり續けて心を統一しよとするのです。

第二「常坐三昧」と云ふのは、坐つたなりで今の精神統一を九十日やりつゞけるのですが、此の常行も常坐も常人には容易に出来るものではありませんから、第三の「半行半坐」と云ふことを許してある譯です。之に方等と法華との二種があつて、方等は行道を百二十回やつては坐禪するのであり、法華は「歩き乍ら」と「立つて」との二つの方法で法華經を讀み、そのあとで坐して法華經の意味を考へて行くもので、念佛と經典との相違はありますが大分樂になる譯です。次ぎの「非行非坐」と云ふのは言葉は少しあてはまりませんが、其人の隨意で前の方法の歩いたり坐つたりが勝手にやるものです。任意にやれる丈に一層樂になつて居るのです。然しうづれにしてもそれを「九十日間やり續けられるか」と云つたら、大概の人は「九十日なんて御免だ」と云ふに相違ありません。現代人には一日だけでも相當ウンザリすることです。

う。
比叡山などにある「常行堂」は其第一の常行三昧をやる爲の道場なのです。

法華の行者は此の四種三昧をやらねばならないのですが、中々つとまらないらしいです。ですから、南岳大師と云ふ禪宗の第六祖慧能禪師の高弟であり且つ馬祖道一の師匠にあたる人ですが、南岳と云ふ處の觀音院に居たので、さう云ふ名で尊稱されて居た偉い人です。ところが其弟子達に此の四種三昧をやり遂げる程の人は居なかつたのですし、また我國では傳教大師の御弟子の中でも慈覺大師と云ふ人は最もすぐれて居た方でしたが、第二の「常坐三昧」は御自分の實驗上到底誰人にも困難な修行だからせめてはと云ふので常行三昧にあらためたと云ふ話ですが、それにしても二日や三日なら出来もしませうが、私達が九十日もやつたら恐らく神經衰弱になつてしもふかも知れません。

然し印度などの苦行者には今でもやつて居る人が相當あるらしいです。段々馴らして行つたらやつてやれない事もありますまいが、事實やつて見て「佛になれる」ならばお樂しみと云ふものです。

現に一人も佛になつたと云つて居る人がないではありません。

實證即
ち信仰

んか。若し本當に誰でも佛になれるものならば印度のベナレ
スあたりの苦行處には佛がウヨウヨして居なければなりません
し、古來から傑出して天台の高僧達も既に「我れ現身成佛
せり」と宣言して居なければならず、謂ゆる「八相示現」し
て釋迦牟尼佛と同じやうな生活形式を取つて居なければなり
ませんけれど、いまだにそんな話をきゝませんところを見ま
すればやつぱりそれは理論だけであつて實證した人がないの
ではないかと思はれます。

そこへ行くと淨土門の念佛は直ぐ證が經驗されたもので
す。即ち信仰とは實證のことだからであります。イヤ實證の
ない信仰と云ふものはあり得ないからです。

誰でも「有難い」と思つたらこれが即ち證であり信仰だか
らであります。

そして其證は「我れ佛と成れり」と云ふやうな自惚れたも
のではなく「凡夫なるが故に」と云ふ實感の次ぎにひらめい
て來た心境の轉換であり、頑固な人格の中心核が置きかへら
れて素直な心になつたものですから、平凡ではありますが如
來様にまかせ切つた處に、グツと持ちこたへのある「腹の出
來た」人になれるのであります。

それは恰かも戦線に居る我が皇軍の將士が、一身を陛下の

大御稜威に捧げ奉つて敢て悔ゆる處なく、欣然として敵彈
の中に飛びこんで行けるのと同じ心狀で、我が魂を如來の
大生命の中にあづけて仕舞つた以上、魂以下の問題は悉
く小問題であつて、何邊へ何うころんだところで大した事
ではないと凡てを達觀して行けます。また既に根本問題が決定
して居るのですから、落着いて幾多の問題に對する正しい觀
察と對策とが考へ出されますから、何んな問題にぶつかつて
も少しもあわてふためく事のないのは當然であります。

つまり「本願に順ず」と云ふ「素直に親船に乗つた」氣持
は、自分の運命に對しても敢て反抗をしません。素直に忍従
して、しかも其難局打開の爲に周圍の惡條件の解消に邁進
いたします。だから單なる消極的な「運命論者」と違つて、積
極的に條理ある打開策を講ずる充分な餘裕を持つことが出來
るのです。

即ち「本願に順ずる」ことは「天地の大生命に従ふ」こと
で、是れ程大きな「素直な心」はありませんし、そしてこの
生命の本流に「己が全身全靈」をまかせて居る限り、御國の
爲めに一身を捧げる事にも安心し切つて捧げ得る筈ですし、
生命を「永遠の命」の中にまかせて居る以上、かの正成の「七
生報國」を誓つた誠忠や、廣瀬中佐の「七生盡忠」を誓つた

赤誠も當然湧いて来る眞實心の根柢でもあります。是れ宗教的に「死なない自身」をハッキリ確認して居るからであり、六道にしばらく居ない阿彌陀即ち大自在の世界に如來「無礙光」の心境の一分を自證して居るからであります。

理論的にいくら立派に即身成佛を説いて居ても、其實踐に依つて自ら證明し得る確認がなければ何にもなりません。

また幾ら確信に依つて「我成佛せり」と稱しても名實共に具備して十人が十人ながら事實上の「佛の生活」がなされて居なければ何にもなりません。

然るに淨土教の信仰は、自己反省に依つて個人的には救はれないことが確認された時、自然に精神轉換が行はれて、理想的環境への順應がハッキリ「信仰」と云ふ特別な心理状態の中に認識されるのですから、誇大妄想的なものではなく、極めて平凡ではあるが、極めて弾力性に富んだ心境を得るものです。

その信仰は常識的であり人間的であつて、常に反省に依つて段々強化されつゝ行くものです。

此區別をハッキリ知つて置かないと、成佛主義と往生主義との二つの信仰形式が混線して、往生主義であり乍ら成佛主義が加味されたり、成佛主義で居乍ら佛の「大慈悲」を説く

往生主義が混入したりして來ます。

それはさて置き、聖道門佛教の最も盛んであつた當時に於て「佛法修行其證を得る事、唯だ念佛の一行のみなり」と云ふ法然上人のこの御言葉は、今日の私達には到底想像し得られない程の強い響きを持つて居たに相違ありません。隨分法然上人は謙虚で遠慮勝な人ですが、かう云ふ自分の確信を發表せらるゝ一段になりますと、思ひ切つてスバリと大膽に云はれて居ます。この法語なども餘程の強い確信でなければ云へない言葉です。

今や非常時局に際會して國民精神總動員の實施せらるゝ秋、私達國民は一致協力「堅忍持久」の強い心を持たねばなりません。そして老も若きも男も女も共に共に刻苦精勵其業務に努め、無駄を省き消費生活を合理化して其經財力を充實せしめなければならぬ時ですから、如何なる艱難が來ようと、へこたれることのないやうに一層正しい信仰を堅持せねばならぬと思ひます。

そして正しい信仰こそは和戰兩様如何なる時でも必要ですが、わけても非常時難克服には更に一層必要を痛感することは申し上げる迄もないことでせう。

(字解)

尋常なる尼女房達（尋常の）（よのつね）ほどほどに女らしく優しさ尼僧及び婦人達。

戒（法然上人は慈覺大師（圓頓菩薩戒と云ふものを我國へ傳承した比叡山延曆寺の第二世）九代の正統を承け繼いだ戒の師なるを以て三朝の帝を始め奉り文武百官庶民に至るまで争つて上人に戒を授らんとしたり。之を授戒と云ふ。當時最も盛んなり。

入滅（尊き僧の死を云ふ。

方等（大乘と云ふこと。

（二つ共此處では四種三昧の内
の名稱で方等經、般若經に依
る修行法と云ふ意味なり

般若（智恵と云ふこと。

末代（釋尊滅後千五百年（又は二千年）後を末法と云ふ。

凡夫（平凡人即ち一般的な人と云ふ意味。

結界（境界を結びて此處から此處までと區別すること。

深廣（法然房當時第一の學者と云はれた證眞法印を「淺廣の寶地房」と云つたのに對して法然上人がそれよりも一層學問の深かつたのを讀めた當時の世評。

鎮西上人（聖光房とも云ふ。淨土の第二祖で本年三月行はれた「三上人遠忌」の内一人。九州に居られたから

鎮西上人と稱せらる。本名は辨阿。

三重の念佛（一、摩訶止觀の念佛。二、往生要集の念佛。三、選擇本願の念佛。

「空」「中」（佛敎のむつかしい哲理。

「即身成佛」（現在此の肉身のまゝで佛になること。

大用力（大きな働き。

行道（御堂の中をめぐること。

「八相示現」（誕生から逝去までの一生を八つに分けて佛の生活が他の一般の人と異つて居ることを示すもの。

無碍光（阿彌陀の別名。

中村辨康師著 最新刊

法然上人聖語讀本

念佛に始まつて念佛に終る!! たゞ念佛の一願の

み!! 而して人は不斷の煩惱のまゝ救はる!! 信仰

の偉力!! 一日一章信仰への悦しきいざなひ!!

第一書房 發行 定價一圓五十錢（本會でお取次
いたします）

編輯後記

◇理論は如何様にも述べられようとも、戦争が續けられてゐる事は嚴然たる事實だ。本誌は出世間的な佛教雑誌ではあるが、事實を見逃す事は出来ず、本誌は「支那事變」を特輯にした。

◇たゞ残念に思ふのは、本誌は時事評論を取扱へないので佛教徒の立場からの事變批判を掲載し得なかつた事である。

◇然し特輯に集め得た諸原稿は他誌に見られない独自の味を持つてゐる。その配合に編輯者の苦心を買つて頂きたい。

◇巻頭に「佛教の戦争観」を掲載する筈であつたが、依頼した執筆者の止む得ない事故から果し得なかつた。人間の争闘を眞向から否定する佛教の教義は戦争と抵觸しないのか。この指導原理が明らかにせられぬ限り、事變に對する

佛教徒の態度も定らぬわけだ。來月號には是非ともこれに對する明答を與へる原稿を掲載して本誌の埋合せをする積りである。

◇例によつて新執筆者を紹介すると、作田高太郎先生は淨土宗の篤信者で前文部參事官の顯職にあつた方、多忙の中に御執筆下さつた事を厚く御禮申上げる。後藤朝太郎先生は衆知の支那通の大家、里見達雄先生は淨土宗務所の庶務部長、眞野先生無き本會にいろ／＼と御配慮を賜つてゐる。

◇吉田絃二郎先生から再び玉稿を頂いた。喜びにたへない(東)

◇今號は事變特別號にするかどうかと編輯會議で論議されたが、特にけたまはしい興憤をかもす事を差し控えて、特輯號とした。

◇その内でも都新聞從軍記者細井正道氏の現地報告は目のあたり皇軍の苦闘を物語つて鉄後の人々をして正襟せしめるであらう。

◇「戦争は何時迄続きますか」とは誰しも發する質問で、誰もが、さあともごつく問題である。

◇宗祖上人は「仇敵は絶えず」となし戦争を避けて入山し カントは平和論を唱へ、ヘーゲルは戦争を讚美した。……

◇兎も角人間は平和を愛好し戦争のない社會を願求するのであるが人間の希望に反して戦争は古來絶えないのである。

◇今の時事變も、何時迄續いてどうなるか「分りませんなあ」と言ふのが賢い答へ方である。何故なら人は支那、ロシア更に全世界の狀態を認識しても日本それ自身の認識と首相の社會正義の具體的表現にゆきづまつてゐるから。

◇我々に殘された問題は唯、事變が一段落した曉に疲弊せる大衆の行方と、傷病兵生涯の待遇が如何にされねばならぬかと言ふ事のみである。(祐輔)

淨土 十一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和十三年十月三十日印刷納本
昭和十三年十二月一日發行

(定價十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人 赤尾 光雄
印刷所 大日本印刷株式會社
發行所 法然上人續仰會
東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京 八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢 (送料一錢)

一ヶ年 金一圓 (送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人續仰會の會費です。入會御申込みと同時に一圓御收めになれば「淨土」が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

布教用書に最も良し

念佛讀本

念佛とは何？ 六字の名號の中に籠る信仰の眞髓は何に？
第一線に活躍する教界の指導者が、凡ゆる角度から念佛の現代的意義を説いた教化の最前線に立つ書！

内容

生	中村辨康
死	佐藤賢順
佛	大野法道
本願	眞野正順
信と行	石井教道
念佛の集ひ	笹本戒淨
社會生活	島野禎祥
女性	江藤澂英
家庭生活	佐藤春夫
念佛の意義	椎尾辨匡

菊判一二三頁・オフセット表紙付
本文五號總ふり假名付
廿三錢（送料共）

講話 一枚起請文

法然上人の「一枚起請文」が淨土宗教の精髓を盡したものであるのは今更不言を要しませぬ。この簡潔流麗な御一文の中に籠る本當の信仰精神を著者の豊富な體驗と該博な智識に基いて、易しく詳しく説いたもので、これによつて毎日皆様がお讀みになる「一枚起請文」の正しい意味が、生活に即して、はつきりと解ります。目下非常な好評で、寺院、諸團體から布教用、教化用として多數の注文に接してをります。定價拾三錢（送料共）

多部數購入者への特典
團體、個人を問はず本書を一時に十部以上御購入御希望の向には一割引（九錢）とし、送料は當方にて負担します。但し代金引換郵便はお断り申します。切手代用は一割増しに願ひます。

發行所 法然上人鑽仰會
振替東京八二一八七

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十二年十月廿日印刷納本 昭和十二年十一月一日發行
淨土第三卷 第十一號 定價金十錢（送料一錢）